
とある魔術の超戦士

タラさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の超戦士

【Nコード】

N3737P

【作者名】

タラさん

【あらすじ】

第三次世界大戦から一年。

世界は多少の混沌を残しつつも平和の道を歩もうとしていた。

だがそれも長く続かなかった。

蘇った謎の生命体。

次々と起こる殺人。

それを食い止めるために

だれかの涙を止めるために
上条当麻は伝説を刻む

プロローグ（前書き）

友達と話してたら上条さんってあんがい仮面ライダーにあうよなっ
て事になって現在に至ります

プロローグ

???

一人の男は戦っていた

その身を変え、槍を取り、弓を引き、剣を振り、数多の闇を葬ってきた

そして戦士は眠りについた

だが忘れてはならない

闇がある限り、闇は生み出される事を

だが忘れてはならない

その闇を祓うのは人の――――

2010. 3. 19 PM10:00 第十八学区 某所

洞窟のような場所で、男女合わせて十数人が作業を行っていた。

「準備はいいか？」

「オッケーです」

「あけるぞ」

隊長らしきおっさんの声に答え、何人かが力をあわせてそれをあけていく。

「こんなものが学園都市で見つかるとはな…」

「工事様様ですね」

周りの人たちもただうなづくしかない。

二時間ほど前に大地震が起こったと思ったら、入り口のようなものが口をあけていて、その中には棺のようなものが安置されていたのだから。

「歴史をさかのぼってもコレと同じ埋葬形態は存在しません。世紀の大発見ですよ!!」

興奮する女性を誰も止めることは出来ない。
なぜならこの感情は全員が共有しているのだから。

「なあ…コレに触ったら呪われないかな？」

若い隊員が恐る恐る聞く。

「おいおい、この学園都市で呪いなんてナンセンスにもほどがあるだろ」

「でも…この遺体…生きてるみたいじゃないですか」

さした指の先には、生きているとしか思えないほど腐敗の無い遺体が眠っている。

こんなものを見れば誰だって不安になる。

たとえば科学の総本山の学園都市の人間でも例外ではない

「多分大丈夫だ、とりあえずはこ——」

突然隊長は言葉を切る

「どうしたんですか？」

「いやな…なんか、遺体が動いた気が……」

「やめてくださいよ!!?!? 夢に出たらどうするんですか!!?!」

この時

闇が

伝説が

再び

始まろうとしていた

Episod 1 復活（前書き）

不出来なところだらけでしょうが、一話です

Episode 1 復活

3. 20 PM 00:00 第七学区 某学校

「みなさ〜ん、明日から春休みですが、宿題はちゃんとしてきてくださいね〜」

合法ロリの化身にしてクラスの担任の月詠小萌はかわいらしい声で言った。

「はぁ…」

「どうしたんだいカミヤん。溜息なんかついて」

金髪の少年土御門元春はウニ頭の少年。上条当麻に声をかける。

「いや、春休みだからのんびり出来るなって思っ」

「なにいつてんのカミヤん!!」

青髪ピアスが叫ぶ。

「春休みと言ったら――」

青髪ピアスの幻想は

「ちなみに上条ちゃんは毎日で土御門ちゃんと青髪ちゃんは一週間補習ですよ」

見事なまでにぶっ殺された

「チョット先生！！そりゃいくらなんでも酷くないですか！！？」

「上条ちゃん。」

進級ギリギリのギリギリだったのを忘れたんですか？」

「うぐっ」

度重なる戦闘と入院で出席日数はぼろぼろ。

そのうえロシアでの戦いの後は年末まで帰ってこなかったから赤祭り。

そんな状況で進級できたのは補習無間地獄と周囲の協力もあるが、一番の要因は目の前の担任があれこれ根回ししてていたからだを知っていた。

「残りの二人は赤点組みです。というわけで皆さん来年会いましょう」

P M 00..10 バス停前

「おお、御坂か」

学校の制服を着たショートヘアーの少女、御坂美琴と出会う。

「あんた…何でいんのよ」

「たまにはバスで帰ろうと思ったんだよ…」

「残念だけど後三十分はかかるわよ」

「そうか…んじゃな」

「待ちなさい!!」

「なんだよ？」

「今、暇？」

「ん…っつと…暇だな」

「だったら一緒にご飯食べない？
ファミレスとかでいいからさ」

いつものことを考えると警戒してしまうが、悪意は感じられない。
上条は財布の中身を確認する。

「別にいいけど大丈夫か？
顔真っ赤だぞ」

御坂の顔は茹蛸のようだった。

「そっ…そんなことないわよ!!」

「ふ…ん」

額を御坂のそれにくつつつける

「熱はないみたいだな」

「にゃ!! ニャアニャニャ~~~~!!」

理性が吹っ飛んだ御坂から電撃が発射される。

「うおっ!!」

上条はとっさに右手を伸ばす。

雷が右手に触れた瞬間、消滅する。

「なんなんですかいきなり!!」

「にゃっ!! にゃにゃにゃにゃ」

雷撃の雨を右手で防ぎ続ける。

「やめろやめろやめろ!! マジでやめてくれっ!!」

全力で振り払いながら御坂に接近して、頭に触れる。

「ふにゅ〜」

そして御坂は気絶した

「たっく、いったいなんだぶぎゃっ!!」

側頭部に衝撃を受けて数メートル吹っ飛ぶ。

「ててて。いったいなん」

目の前にツインテールの羅刹がいた。

「し、白井？」

「よくもお姉さまをたぶらかしてくれましたわね類人猿!!」

ツインテールの羅刹。白井黒子は両腿の金属針を抜く。

「ぶ・ち・こ・ろ・し・か・く・て・い・ですわゝゝゝ!!」

（それキャラ違う!! 四位や!!）

上条は転位してくる針と羅刹から全力で逃走した。

P M 00..20 第十八学区 某所

「白井の奴、何で追いかけてくるんだよ…不幸だ」

（それに、ここはどこだ？）

現状を嘆きながら歩いていると、人だかりが見えてきた。

「? なんだ」

好奇心で近寄ってみると、洞窟のような入り口のまわりを、
アンチスキル 警備員
がかこんでいる。

（入り口？）

上条はふと、この前のニュースを思い出す。

（そういえば、工事現場から遺跡が出てきたってやってたな。場所は確か、十八学区）

「かなり遠くまで逃げたもんだ――！！！」

突然、上条は引き付けられるような感覚に襲われる。

抗いがたい感覚に従って柵を越えようとするが、止められる。

「黄泉川先生」

「公務執行妨害的なので逮捕になるじゃんよ。というわけで帰れ」

止められたが上条はものすごく入りたい。
というわけで

「あれなんだ！！？」

あほ臭いことをやってみた。

（今だ！！）

注意が向うに向いた隙に柵をくぐり、入り口に向かって駆け出すが

「へぶちっ」

見事に転んで、顔面をうった。

「連行じゃん」

「……はい」

すると、二人の近くを鑑識っぽい人が通り過ぎていく。

その人が袋に入れて持っていた石で出来たベルトのようなものを見た瞬間、上条の脳裏にヴィジョンが煌いた。

角のようなものが生えた人間が振り向いたヴィジョンが。。

「なんだ…」

「とにかく行くじゃん」

考える暇もなく、連行された。

P M 01..20 第十八学区 警備員分署

「はあ……ようやく終わった」

長い説教の末解放された上条は食堂で食事を取ることにした。

適当に食べていたら、ごく潰しという名の同居人のことを思い出した。

（やっべ！

インデックスのことすっかり忘れてた）

噛み付きの恐怖に脅えながら急いでかきこみ始めたその時、周囲があわただしくなっていく。

「どうかしたんですか？」

「近くで事件があったようだから、君はここにいてくれ」

「あ、はい」

基本的にトラブルに巻き込まれるのは嫌なので上条は大人しくしたがうことにした。

（こんなときに限ってトラブルなんて：不幸だ）

この後、学園都市を巻き込む不幸（災害）を、上条は知る由もなかった。

P M 01..25 第五学区と第十八学区の境目

ビルとビルの間をまたぐような巨大な蜘蛛の巣がその真ん中ほどにかかっていた。

「なんなんだったい」

武器を構え、警戒しながら警備員の一人は巣を見上げる。

「先に向かっていた内の何名かがさらわれたらそうです」

「さらわれた？何にだ」

「それが――」

その先を言おうとした瞬間、上から何かが降ってきて、二人を捕まえバンジージャンプのように巣に戻った。

「!!」

一瞬だけ見えた影は明らかに人間の姿だった。
全員が固まっている間に巣からソレが落ちてきた

「なっ…」

落ちてきたソレを見て、全員今度こそ固まった。
別に百メートル以上の高さから落ちてきて綺麗に着地できる人間がいても、ここなら能力者だと割り切れる。
だが、今日の前にいるソレは

あまりにも異様だった

あまりにも異常だった

あまりにも異端だった。

ソレは腰布のようなもの以外には悪魔の顔のようなベルト以外は特に実につけていない。

だがそれ以上に異常なのは

肌は泥色で

口は蜘蛛のようで

両側頭部からは蜘蛛の脚のようなモノが生えているコト。

そして何より

人が発することが出来ない何かを全身から放っていた。

「う、撃て!!」

本来なら警告するのが手順だった。

だがは発砲した。

そうさせるだけの何かをソレは放っていた。

放たれた銃弾はかたっぱしからソレに命中し、めり込んでいく。
だが――

「なっ!!」

体中にめり込んだ銃弾がひとりでに体外に排出され、傷口が瞬く間にふさがっていく。

心臓あたりや頭に当たったものを含めてだ。

ソレは警備員達に向かって歩み寄り、無造作に腕を振う。
それだけ

たったそれだけで沢山の血が流れていく。

「ザボゾロガ」

ソレは奇妙な言葉を放ち、暴れる。

片っ端から倒れていき、子供達を守るといふ芯が無ければ瓦解してしまいうまくない追い詰められていく。

「おい！お前は逃げてこの事を知らせに行け」

1人の警備員は近くにいた青年に声をかける。

「えっ。でも…」

「来月子供生まれるだろ。だからいけ！」

「けど——」

「安心しろ。このくらいの修羅場はなれっこだ」

声色から強がりだと理解できる。

けれど、その中には強さもあつた。

「……すいません！」

そう言つて車に乗つて逃げる。

「!!」

ソレは車のほうを向き、口から糸を吐いた。
糸は強化ガラスを割り、青年の首を絞める。
そしてソレは糸を伝つていき——

「いったい何が起こってるんだよ」

途切れ途切れに聞こえてくる話を纏めると、近くで良く分からない奴が暴れている。

先にいた人達は壊滅した。

そして、そいつはこっちのほうに向かっているらしいという事。

「上条、お前は早く逃げるじゃん」

「黄泉川先生…」

「生徒を怪我させるわけにはいかないじゃんよ。さっさと行け」

「……はい」

上条が調理場の方に入ろうとした時、入り口の方で何かが盛大に壊れる音がした。

「!!?」

「お前はここから動くな」

そう言って黄泉川は出て行く。

数秒迷ってから、上条は後を追った。

上条が眼にした光景は惨状の一言だった。

入り口は壊れ、何人か巻き込まれたのか壁のほうで呻いていて、突

っ込んできた車もただでは済んでなかった。

車の後ろのドアが破られる。

脚から順に泥色の体が這い出てくる。

警備員達は目の前の異形に対して言葉が出ない。

ソレの眼が、何かに止まる。

視線の先にはトランクの中に入った、石で出来たベルトのようなものが落ちている。

恐らく、車が激突した拍子に鍵が壊れて開いたんだろう。

そして、ベルトを見たソレの様子が変わる。

「ボセバ デスドン クウガ」

視線に気付いた上条は視線を追い、ベルトに眼をやった。

その時ベルトが煌き、ヴィジョンが浮かぶ。

赤い鎧のような物を纏った戦士の姿が頭の中に流れ込む。

「また………いったいなんなんだ？」

呟くのを合図にしたかのようなタイミングでソレは雄叫びのようなものを上げ、暴れまわる。

次々と警備員の人達を殴り飛ばし、払い飛ばしていく。

銃弾が当たっても瞬く間に再生する。

呆然と見ていた上条は走り出し

「やめろおおおおおおおおおおお!!」

「よせ!!」

誰かの制止を無視して上条は、両脚に力を溜め、拳を握り、弾丸のように加速し、体重を乗せた拳を叩き込む。砲弾が直撃したような轟音が響くが、ソレは一顧だにせず上条を払い飛ばす。

「ごっ　ぐあっ…」

痛みで苦しみながらも立ち上がろうとすると、右手に何かが触れる。見てみると、石のベルトをつかんでいた。ソレは上条を抹殺しようと歩いてくる。上条はソレとベルトを交互に見る。

（このままじゃ皆も俺も死ぬ！！）

最悪の未来が頭をよぎり、続いて戦士の映像が浮かぶ。

「逃げるじゃん上条」

打ち所がよかったのか起きている黄泉川がよろよろと立ち上がる。先生は。警備員の人達は勝てないと分かっているけど戦うだろう。だから上条は

「先生…すいません！！」

一抹の望みに賭け、ベルトを　腰に入るように押し付けた。

「うわっ」

眼がくらみそうな光に包まれたと思った次の瞬間、ベルトはなくなっていた。

「あれ？ベルトは…」

突然、内側から貫かれたと言っても問題ないくらいの腹痛に襲われる。

「いったい何が起こったじゃん!？」

黄泉川は傷みも上条のピンチも頭から飛んで眺めていた。

(ベルトが、上条の体に吸い込まれた?)

「うわあああああっ」

苦しんでいる上条にソレは近づき、外に向かって思いっきり投げ飛ばす。

「がはっ」

思いっきり背中を打ちつけ、酸素を吐き出しながら転がっていき、バイクに激突する。

(ヤバイ……死ぬ。マジで死ぬ!)

お気に召したのか、他に理由があるのかわからないが、ソレは上条に向かって歩いてくる。

「——んでたまるか」

ベキベキと体が悲鳴を上げるのを無視して上条は立ち上がる。

「死んで たまるかあああああああああ!!」

最後の力を振り絞って突撃し、右拳を腹に当てる。
先ほどと違い、ソレはよろける。

「コレは？」

自分の右手を見ると、自分手以外の何かに変わっている。

（変わった？）

再び襲い掛かってきたそれに向かって上条は応戦する。

「俺は！」

（皆を守る!!）

左拳が 右膝が当たるたびに姿が変わっていく。

最終的には全身が変わっていた。

「コレは…なんだ？」

顔に触れてみると妙に硬い。

ビルのミラーで確かめてみると、

「なんだこれ…」

姿が変わっていた。

「これって…さっきのと同じ？」

「ツボグ
リジバブ
バダダバ」

だが確かめる暇なんて敵は与えてくれない。

「がつ」

ソレは思いつき首に手刀をかまし、蹴り飛ばす。

「いっつ…やっつっろおっ」

立ち上がり、バイクを投げ飛ばす。

それはあっさりと払い飛ばされるが、狙いは注意をそらすこと。

「うおらあああああああああああああああ」

その隙に近くにあった大型車両を押し、そのままソレを巻き込んで壁にぶつける。

(やったか?!!)

「ゾン
デギゾバ
クウガ」

ソレは上条以上の力で押し返す。

「才才才才才才才才才才才才」

「くっ」

轢きかえされそうになるが、横に跳んでかわす。

「かつ…」

立ち上がった瞬間を狙われ、左腕に糸が巻きつき、そのままビルに向かって投げ飛ばされる。

「くっ…うあっ」

上条は必死で減りを掴み、上ろうとする。

その間にソレはまさに蜘蛛のように壁を張って上ってくる。

「はあっ…はあっ！」

ようやく上りきり、壁を背にするように動いて呼吸を整える。

そこに、上ってきたソレが接近しながら右腕から鋭い爪を伸ばし、刺し殺そうと振われる。

「うおっ」

とっさに右手で払うが、激突した壁をあっさり貫く。

「ムン！」

一息とともにソレは腕を振り、壁を削りながら上条を払い飛ばす。そのまま外に向かって倒れるが、上半身だけがはみ出た形になる。立ち上がろうとするが、背中を踏みつけられ、押し付けられる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

（な、めるなあっ）

勝利の雄叫びを上げるソレの脚を体を回して振り払い、脇を蹴る。

「ググ」

「はあっ！」

即座に立ち上がって顔、腹、胸とお構い無しに殴りまくる。

「バレスバジヨ クウガ」

ソレは軽く跳んで拳の範囲から逃げ、糸で右腕を絡め撮り、ジャイアントスイングの要領で振り回し、地面に叩きつける。

「ぐっ」

面倒なことに振り回された拍子に左腕まで絡め撮られていた。

（くそっ…はずれない）

必死ではがそうとしているところにソレは爪を突き刺そうとしてくる。

上条は空いている右腕で止めるが、不利なのは否めない。

（今度こそ…やばい！）

ローター音と共にヘリがやってくる。

「化け物が二匹…」

左腕の怪我を押してやってきた黄泉川が苦々しい顔で呟く。

「どっちを狙うんですか？」

「両方じゃん！」

黄泉川は右腕一本でサブマシンガンを発射する。

さすがに片腕だと狙いがうまく定まらず、見当違いのほうに弾丸がいくが、何発かアイツに当たる。

「よしっ」

「ン？」

鬱陶しく思ったのかソレは糸を切り、ヘリのほうをむき、ドアのフレームに糸を絡めて飛び移る。

「おちろー!!」

至近距離でマシンガンを発射。

弾丸が上半身にめり込むが、再生と共に出て行く。

「ギへ」

「くっ」

爪を必死で避ける。

「ギ」

糸を解き、飛び移ってきた上条が腕で首を絞め、勢いで床に押し付けようとする。

「フン！！」

だがソレは踏みとどまって上条を振りほどき、肘打ちを放つ。
不安定な状態で衝撃を受けた上条は落下するがかるうじて縁につかまる。

「ゴパシザ クウガ」

指を蹴り飛ばそうとするが、ヘリのバランスが偏ったせいで大きく揺れ、バランスを崩す。

「ググ」

その隙になんとかよじ登り、拳を握り、上体を捻り

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

殴り飛ばす。

ソレはゆつくりと落ちていき、建物を突き破った

「お前は…なんだ」

説明することが出来ない上条は、無言で飛び降りた。

Episod 1 復活（後書き）

ようやく書けた。

マジでようやくかけた。

カイバー○ンさん、イルドⅡガリアさん、白亜さん、他多数
私に文章力を分けてください！！

後速筆力も

Episode 2 変身（前書き）

難産だった

またDVD借りよっかな

Episode 2 変身

3. 20 PM 11..30 第七学区 サンタマルコ教会近辺

一人の女性が薄靄の中を歩きながら電話をかけていた。

それを教会の屋根の上から見下ろしていた異形の生物が空を飛んで近づき――悲鳴が響き渡った。

3. 21 AM 12..30 第七学区 某ファミレス

「zzzzzzzz」

上条は完全に寝ていた。

「起きてようま」

とかいてニート
同居人のインデックスは机に突っ伏して眠っている上条の頭を叩いたり噛み付いたりするが起きる気配が無い。

「どうしたの？」

「その声は短髪!!」

「御坂美琴よ!」

「そっちの人達は?」

「御坂さんの友達の佐天涙子です」

「初春飾利です」

「白井黒子です」

3人は挨拶する。

「あのねあのね。とうまが変なんだよ」

「いつものことではありませんか」

白井は酷い事を言う。

「違うんだよ！朝だって何やっても起きないんだよ。」

背中の上でドンドンしても噛み付いても踊ってもビクともしないんだよ！！

何とか起きて補習に行ってご飯食べに着たけど、この調子なんだよ」

（それって気絶してるんじゃない……）

三人がそう思っている間御坂は、上条の寝顔をじっと見ている。

（意外に、可愛いじゃない）

さりげない動きで顔を近づけていき

「ふあゝ」

一気に戻した。

「……御坂に白井か。後は…」

「とうま！ご飯！！」

お預けを喰らっていたインデックスは怒鳴る。

「わりいわりい。チャレンジラザニア二つお願いします」

30分いないに食べきらないと3000円取られるが、勝てば5000円もらえるというものだ。

「顔が赤いよ短髪」

インデックスに指摘された御坂の顔はさらに赤くなる。

「熱でもあるのか？」

上条は美琴の額に手を伸ばすが

「せいっ！」

白井に叩き落とされる。

「なにすんだよ」

「お姉さまには指一本触らせませんわ！さあお姉さま。黒子がしっかりと看病をぐっ」

変態は制裁された。

「自重しなさいよ自重」

「お待たせしました」

店員が5人前はありそうなラザニアを運んでくる。

「インデックス。一つ言いたいことがある」

「なに？」

「これを食べきらないと、食い逃げしなくちゃいけなくなる」

「え？」

「だから…」

「それではよい」

「死ぬ気で食べろ」

結果だけ言うと、インデックスは3分、上条は10分で食べきった。

「あんなの良く食べれるわね」

「何か知らないけど眠いし腹減るしで大変なんだよ」

そう言ってあくびする。

「また頼んでいい？とうま」

「んなことしたら出禁くらうわ」

「そういえば、えっと――」

「上条当麻です。そっちは？」

「佐天涙子です。それで当麻さん、最近できた都市伝説を知ってますか？」

「いや？」

「白怪人VS蜘蛛怪人」

ギクっとなる。

「思いつきりでたらめ臭いな、それ」

「なんでもウニ頭の人が白怪人になって戦ったらしいですよ。もしかして当麻さんが…」

ニヤリとした顔で見ってくる。

「なわけないだろ？」

どういえばいいか困っていると、窓をノックされる。
みていると、黄泉川がいた。

（ラッキー！）

「チョット行って来る」

何とか切り抜けた上条は黄泉川の所に行く。

「どうしたんですか？」

「単刀直入に聞くじゃん」

「な…なんですか？」

「あのときの白い奴の事、何か知ってるか？」

冷や汗まで流れてくる。

「あの後気絶したから知りません」

「そうか…けど、これだけ入っとくじゃん」

「？」

「遺跡の件にも、怪人の件にも絶対にかかわるな」

「は…はい。わかりました。あのクモ男はどうなりました？」

「死体はなかったから多分生きてるじゃん。

あと、補習頑張るじゃん」

そう言って黄泉川は去っていく。

黄泉川を見ながら上条は誰ともなしに呟く。

「あれはいったいなんなんだ？」

(それに…)

ベルトがあつた辺りを押さえる。

「こいつは…いったい」

考えていた次の瞬間、全員出てきた。

「見てみてとうま。大儲けだよ」

インデックスの手には3万円が握られている。

「何やってんのお!!?!? 出禁くらいいたいの!!?!?」

「これでまた食べたいよ」

「全額貯金です」

上条家家訓…あぶく銭は貯金

「え~~~~」

インデックスは超不満顔

「わがまま言いたければもう少し家に貢献しろ」

「カミナンの再放送あるからかえるね」

インデックスはダッシュで消えた。

「当麻さん」

佐天が寄って来る。

「なんだ？」

「新しい都市伝説が出てきました」

そう言って携帯を見せる

「何々——吸血鬼……吸血鬼!!?」

（なんでそんなのがここにいるんだ？）

吸血鬼と言えば吸血殺し（ディープブラッド）の時に話題になったあの吸血鬼しか浮かばない。

「第十八学区周辺でコウモリみたいなのが飛び回って人を吸い殺してるらしいんです。」

証拠にその人達の首には刺し傷のような痕以外は何もないとか……」

（コウモリみたいなのって…まさかな）

昨日のあれを考えると冗談に思えない。

「というわけで伝説探索に行きましょう!!」

「まったく…そんなくだらないことを信じてるんですの？ねえお姉

さま——」

ため息を付き名が振り向いてみると、御坂はプルプル震えていた。

「どうしたんですのお姉さま？ もしや——」

「べべべ別に怖くないわよ！……行ってやるわよ」

（まだ何も言ってないんですが）

「当麻さんはどうするんですか？」

上条は佐天の話を単なる都市伝説だと笑いきれない。
ステイルが言っていた吸血鬼もあるし、何より——

（昨日のヤツみたいなのだったら、御坂でもやばいだろうし…）

「俺も行く」

「じゃあ早速行きましょう！！」

P M 01:00 サンタマルコ教会近辺

「ゲッ」

上条の足が止まる

「どうしたんですか？」

「黄泉川先生がいる」

アンチスキル
その上警備員の人達もいた。

「ちょっと行ってまいりますわ。行きますわよ、初春」

白井と初春は空間移動テレポートで警備員のところに向かい、二・三分すると帰ってくる

「すいませんが、帰ってくれませんか？」

白井の目は真剣みを帯びている。

「何かあったの？」

「あそこで殺人事件がありました。あれで15件目だそうです」

3人は絶句する。

「ただ、全員に奇妙な共通点があるんですよ」

「共通点？」

「はい。」

被害者は全員失血死で、首筋の刺し傷以外に目立った外傷がないんです」

「まさかそれって…吸血鬼?!?!?」

佐天の顔が劇画風になる。

「吸血鬼かどうかはともかく、私達は手伝うことにしましたので、皆さんはお引き取りください」

二人はまた消える。

「ちょっとオレ、あの協会行って来る」

「え？」

「白井さんは帰れって行っただじゃないですか」

そう言ってる佐天の眼は行きたくてうずうずしている。

「とにかく、行って来る」

上条は何かを察知したのか、教会に歩いていった。

「ま、待ちなさいよ！ 佐天さんは待っててね」

御坂は後を追う。

「何で付いてくんだよ」

「アンタが無茶しないように見張るためよ」

「協会の中見に行くだけなんだけどな……だから付いてこなくていいから帰れ」

「うう…」

会話しているうちに教会の裏に着く。

「怖いなら帰っていいぞ」

「別に怖くないわよ！」

「足が震えてるぞ」

「!！」

「電撃出したらばれるから無し!!」

「わかってるわよ」

入れそうな場所を探してみると、三階くらいの高さの窓が開いている。

「よしっ、行くか」

そう言って上条は出っ張りを利用して上っていく。

「おいでくぞ」

「待ちなさい！」

御坂は磁力を利用して駆け上っていく。

「ずるいぞコンチクショウ!!」

文句を言いながらも御坂に続いて入る。

「…暗いな」

「うん」

教会の中はカーテンで閉ざされていて、光がろくに入らない。

「だれかいませんか〜」

叫んでみるが、反応がない。

「まさかだけど〜」

「縁起でもないこと言わないでよ!!」

御坂は震えている。

「オレがいるから安心しろ」

美琴は赤面する。

その時――

「ぎゃあああああああああああああああああああああ」

「御坂!どうした!?!?」

気配を一切出さずに、不気味な神父が現れた。

神父は妙なプレッシャーを放っている。

「あの……この人ですよね？」

神父はプレッシャーを放ちながら近づいてくる。

「勝手には入ってきて、すいません」

近づいてきた神父は、カーテンの隙間から漏れた光を浴びた瞬間、眼をそらし、顔を隠す。

「無事ならいいんです！それじゃあ！！」

二人は全速力で撤退した。

「どうでした？」

「神父さんが怖かった」

「そうですか。」

それはそうと、二人がいない間に考えてたんですが、夜にコ吸血鬼探しをしませんか？」

「はい？」

「私達でコウモリ男を捕まえて売りましょう！！」

「私は寮監が怖いからパス」

（夜遊びの常習犯の御坂さんがいまさら気にするはずがない。つまり…）

「怖いんですね」

悪い顔で聞く。

「そんな訳ないでしょ！！コウモリ男なんて超電磁砲で一発よ！！」

（計画通り！！）

「上条さんはどうします？」

「行くよ」

吸血鬼の正体を確かめたいのが目的だけど、言わない。

「よかったですね、御坂さん」

「なっ、何が世！！」

「べっつーにっー」

佐天はムフフと笑った。

19..00 同場所

「死にそうな顔してますけど、大丈夫ですか？」

銀の十字架にニンニクに杭とフル装備な佐天は真っ青な顔の御坂を

心配する。

「ももも問題ないわ!!」

すでにグロッキー寸前だ。

「それじゃあ張り切っていきましょう!!」

「けど、アテはあるのか？」

「教会です!!」

「弱点満載だと思うんですけど？」

「昨日読んだ漫画に、ああいうところにも住んでるってありました。と言う訳で行きましょう!!」

そう言って佐天はクロックアップな速さで教会に走っていく。

「で：おまえは大丈夫なのか？御坂」

御坂は生まれたての小鹿並みにガクガク震えている

「引っ張ってやるから行くぞ」

「—————うん」

伸ばされた手をとろうとしたその時

「「!!」」

銃声が聞こえてきた。

「なんだ・・・？」

「たぶん、銃声だと思う」

さらに断末魔のような物が聞こえる。

「あんたは待ってて!!」

「御坂は待ってろ!!」

見事にはもって同時に走り出す。

済し崩しに二人一緒にいくことになり、悲鳴が聞こえた場所についた。

「「なっ…」」

二人が見た物は、悪魔の顔のような物がついたベルトを巻いたコウモリ男が警備員の人達に襲いかかっている光景だ。

「いやああああああああああああああああああ」

容量オーバーでパニックになった御坂は超電磁砲を発射する。

横っ腹で受けたコウモリ男は吹っ飛んで壁を突き破っていく。

「……やりすぎだろ…」

「コウモリ男だから問題ないわよ!!」

(けど流石に生きてないだろ…)

とりあえず終わったと思った次の瞬間

「うそっ」

コウモリ男が少しふらつきながら出てくる。

「効いて…ないのか？」

「超電磁砲の直撃よ!!!？」

実際は脇腹が深く削れたが、瞬く間に治っただけだ。

『ギラボザ ビギダ』

(頭ならどう!?)

コインを構えてチャージするが、コウモリ男は真上に飛ぶ。

「くっ」

照準を合わせなおすよりも、コウモリ男の方が速い。

(やられる!)

御坂が眼を瞑ったその時

「はあああああああつ」

上条が割り込んで鼻っ柱を殴る。
チョット効いたのか着地したところを蹴る。
連打を浴びせると共に白い姿に変わる。

「また、変わった」

「ハアッ」

コウモリ男の右ストレートにカウンターで顔を殴り、鳩尾に肘を突き刺し、回し蹴りを決めるが、効果がある気がしない。
それ以上に、上条は奇妙な違和感を感じる。

言葉であらわすなら、今の自分が本当の自分じゃないような感覚だ。

（とにかく、こいつを皆から引き離す！！）

「うおらっ！！」

渾身の力と捻りをこめた右ストレートを繰り出すが、コウモリ男は片手で止める。

「くそっ！」

左ストレートも止められる。

「ジョバグギス」

コウモリ男は上条に頭突きを放ち、ひるんだところを殴り飛ばす。
上条は5mくらい転がって、そのまま気絶する。

「ゴンバ　ゴラゲボヂゾ　グデデジャス」

コウモリ男が御坂の方に歩いていく。

御坂はコウモリ男の言葉はわからない。

だが何を言ったか理解できた。

「あげないわよ!!」

超電磁砲は発射前に潰されかねないし、周囲の物体を利用した攻撃も効くか分からないから雷撃の槍を発射する。
さすがのコウモリ男もよけられず顔面に直撃する。

「ガガ」

見た感じ傷はないが、様子から見て思いっきり効いている。

「もういっちょ!」

電力を上げて発射するが、くらいながら逃げていった。

「よしっ。

そういえば、アイツは」

周りを見渡すと、倒れた警備員、そして　倒れた上条が転がっていた。

「…………うま　　とうま~~~~!!」

上条はゆっくりと目を覚ます。

「ここは…」

「気がついたようだね」

聞きなれた声でしたので、どこだか分かった。

「先生。俺は……どうして」

「気を失っていたらしいよ」

「――先生！」

御坂は！

御坂はどうなったんですか！！？」

「彼女ならそこにいるよ」

御坂は枕元に顔を預けて眠っている。

「君のことを心配していたよ。」

ついさっきまでズット起きてたらしいから」

「そうですか」

「女の子を泣かせちゃダメだよ。後、もう帰っていいから」

P M 07:00 第十八学区

買い物の帰りに、葬式でもやっている感じの家の前に来る
誰かの声が耳に届く。

「あの先生、警備員の仕事で亡くなったらしいよ」

「マジで？ いい先生だったのに」

「子供が生まれるって喜んだのに……」

「うわっ」

「これは噂なんだけど、先生は怪物に殺されたんだって……」

上条が立ち尽くしていると、家から妊婦の女性がなきながら出てくる。

上条の中から無力感がこみ上げてくる。

蜘蛛男の時にもっと早くあの姿になれば、コウモリ男を倒せたらあの人は今笑っていたかもしれない。

他の場所でも誰かが泣いているかもしれない。
そう思うと、無性に自分に腹が立った。

「…………ちくしょう」

P M 07..30 上条家

「遅いんだよう…ま？」

噛み付こうとしたインデックスは沈みに沈んだ上条の顔を見てやめる。

「わりいインデックス。

晩飯は舞夏にでも作ってもらってくれ」

そう言って買い物袋を渡して風呂場に入ってしまった。

「——まいか——！！！」

インデックスは隣の部屋に突撃する

「どうしたんだ？」

「とうまが変なんだよ！！！」

「上条当麻が変なのはいつもの事だと思っただけだな——」

「違うんだよ！！私が噛み付こうとしたら命乞いするのに完全スル——なんだよ！！！」

その上、何か暗いし落ち込んでるし変なんだよ！！！」

「アイツが話してくれるのを待つしかないな——。

という訳でご飯作ってやるから入った入った」

「ありがとうまいか——」

上条の異常は頭から一瞬で消し飛んだ。

「アンタ…どうしたのよ」

御坂は死にそうなくらい暗い当麻の顔を見て絶句する。

「よう、御坂」

「いったい何があったのよ!!」

「なあ御坂。」

自分がホントに無力だって思った事はあるか？」

「……あるわよ」

絶対能力者進化（レベル6シフト）の時に自分の行動が無意味になったときに、心底感じた。

必死で動いた結果が無意味に終わる。

その先が最悪ならなおさらだ。

「オレ……無力だった。」

戦えると…思った…のに…何も出来、なかった。
守れなかった…助けられなかった」

泣きながら上条は切れ切れに呟く

「はあ〜〜〜」

それを聞いた御坂はため息を付く。

「まったく……」

アンタはそうやって何でもかんでも抱え込むんだから。
少しは人を頼りなさい。

あいつらの時だってそうよ。

こっちが何とかしようとしたのにいきなり出てきて傷ついて解決して……

こっちの身にもなって見なさいよ!!

アンタさっき自分が無力だって言ったわよね?

あんたはそんな程度の事関係無しで戦ってたでしょ?
それは何で?

妙な能力が(ちから)あるから?

見返りが欲しいから?

違うでしょ!

あんたが誰かを助けたいって思ったからでしょ!?

アンタはいつもみたいに勝手に突っ走って勝手に怪我して勝手に帰ってくればいいのよ。

あんたのそんな顔、見たくないのよ」

最後の言葉は聞き取れなかったが、少しだけ救われた。

「そっか…あんがとな」

上条はうつすらとだけど、笑えた。

「アレ？」

「どうしたんですの初春？」

「吸血鬼事件の起こった場所を見てたんですが、なんだか範囲が決まってる感じがするんですよ。」
ほら

そう言われてみれば、範囲は結構広いしぼらけているが、大体円形に見える。

「初春：被害位置の中心はどこですか？」

初春は計測する。

「サンタマルコ教会です」

「分かりました。」

準備が出来次第私が行って参りますわ」

「慎重ですね、白井さん」

「そりゃああんな物を見たら多少なりとも過敏になりますわ」

「あんなもの……ですか？」

「一昨日の晩、サンタマルコ教会付近を調べていた警備員の部隊の

9割と独断で調べていた183支部の強能力者（レベル3）と大能力者（レベル4）が、殺されたのは知ってますね？」

「……はい」

「偶々映っていたらしいんですの。」

「コウモリ男のようなものが」

「それって、佐天さんが言っていた——」

「恐らく肉体変化系の能力者でしょうが、油断は出来ませんわ」

「御坂さんも連れて行ったほうが——」

「お姉様は一般人です。」

それに、こんな些事にお姉様をつき合わせるわけには行きませんわ」

「そうですか……」

二人は知らなかった。

御坂が能力を活用して盗聴していることを

18…30 第七学区 屋台

「まったく…皆なんで信じてくれないかねえ？

そりゃここでこんなこと言っても笑い話以下だろうけどさあ」

黄泉川の隣に座っているおっさんが愚痴ってる。

（近くで愚痴られると酒がまずくなるじゃん、早く帰って欲しいじゃん）

「ホントに見たんだよお

コウモリ男を」

「！！！！

詳しく聞かせるじゃん！！」

「お、おう。

昨日の夜に見たんだよ、コウモリ男が教会に入っていくのを」

「どこの教会じゃん？」

「……サンタマルコ教会」

黄泉川は代金を払ってダッシュで分署に向かう。
人を呼べば逃げる可能性がある。

可能なら単独で捕縛ないし射殺する。

黄泉川はそう決めて走っていった。

18..40 第七学区 上条家

「とうま、おかわり」

「はいはい。」

言い忘れてたんだけど、インデックス」

「なあに？」

「じつはな――」

上条家に電話がかかってくる

「ちよつとタイム。」

はい上条です」

「一年ぶりだな、幻想殺し（イマジンブレイカー）」

受話器越しに聞こえてくるものは、男にも女にも子供にも老人にも成人にも囚人にも聞こえる不思議な声色。

上条はそんな声で話す人間を、この世で一つしか知らない。

「アレイスター……クロウリー」

声の主は学園都市統括理事長にして、上条が全霊をこめて嫌悪し憎悪する一つの存在。

こいつのせいで何人も傷ついた。

御坂妹や打ち止め（ラストオーダー）や風斬に出会えたことは認めるが、許容できる存在じゃない。

だから戦った。

だからすべてを開放して戦った。

だから殺した。

なのに

「生きてた…のか」

「右方のフィアンマから話は聞いているだろうから、驚くほどのことでもないだろう。」

とはいえ死んでしまったのでな…この一年は療養にあてていた」

霞のように微かな怒りのような物を感じ取れる声で答える。

「なんのようだ」

「第七学区のサンタマルコ教会に行きたまえ、化け物を殺しに君の友人達が向かっている。」

このままだと死んでしまうだろうな」

「!!」

どういうつもりだ」

「君が強くなればそれだけプランが進む可能性が出るからだ」

「まだ諦めてないのかよ」

「当然だ。私はそのために生きている」

「…行かないって言ったら、どうする？」

「君が断るとは思えないがね。」

それではまた会おう。

幻想殺し」

そう言い残して電話は切れる。
行かないと言う回答はないが、あいつの思い通りに進むのは腹が立つ。

だから上条当麻は改めて宣戦布告する。

「いいぜアレイスターⅡクロウリー……自分の思い通りに出来ると
思ってたんなら、
その計画をぶち殺す!!」
げんそ

上条当麻は走り出す。

友達を守るために。

二つの幻想を殺すために。

19..00 サンタマルコ教会

「お前達！」

「警備員の人、それにお姉様!!」

「遅かったか」

三人同時に教会の正門に着く。

「お姉さまはお帰りください!ここは私とこちらの人で処理します」

「お断りよ。あんなのをあんた達が倒せる訳ないでしょ」

(それに、あいつに負担かけたくないのよ)

「警備員の人、お姉様を送りますからしばらく——」

「お前も来るじゃん」

「そんな!!」

「どうしてです!?!」

「どこに送ろうがこいつは必ず戻ってくるじゃん。それなら近くにおいた方が守れる」

御坂美琴は首を突っ込むと決めればなんとしてでも突っ込むタイプの人間だ。

黄泉川は何度か会ったから多少なりとも知っているし、白井はよく知っている。

だから黄泉川の言葉はある意味正論だし、白井は反論できない。

「……わかりました。

ただし!

危なくなったらすぐに逃がしますのでお覚悟を」

「……わかったわよ」

しぶしぶ了承した御坂を連れて、教会に入る。

中はカーテンが閉められていて、ステンドグラス越しの光と蠟燭の明かり以外に光はない。

「お姉様、何かいるか分かりますか？」

「全然」

背後を警戒しながら真ん中くらいまで歩いていると、天井の方で物音がした

「「！！」」

「そりゃっ！！」

音がしたところに雷撃の槍を発射するが、何もない。

「気をつけるじゃん」

「分かっていますわ」

扉の方から音が聞こえる。

全員がそっちを向いた瞬間
リ男が飛び掛ってくる。

ステンドグラスを割ってコウモ

その拍子に蠟燭が落ち、燃え広がる。

御坂と黄泉川は左右に跳んで逃げ、白井は空間移動で距離をとる。

「風紀委員ジャッジメントですの！！」

おとなしく投降しなさい」

警告しながらも白井は目の前の生き物に違和感を感じる。

（何ですのこいつ…同じ人間の気がしませんわ）

「ラダ ミヨグバ リントバ」

不気味な言葉を呟き、突っ込んでくる。

「くっ！」

白井は両腿の金属矢をコウモリ男の四肢に転移させるが、コウモリ男は無視して突っ込んでくる。

「なっ！」

「黒子！！」

「白井！」

御坂は鉄釘の弾丸（番外固体のと同じ）を発射し、黄泉川は発砲する。

それは背中に直撃し、多少なりとも注意をそらす。

白井はその隙に離れるが、勝手に金属矢と釘と銃弾が抜け、再生していくのに驚きを隠せない。

「でたらめですわね…」

「あいつらに並大抵の攻撃は効かないじゃん。

私も殺傷力重視の弾丸を持ってきたけど、効かなかったじゃん」

「そういうことは先に言ってください」

「このっ！！」

周囲の金属を磁力で発射する。
超電磁砲はこんな場所だと発射した後にエライ事になる。
雷撃の槍を撃つと光がダメなコウモリ男に逃げられる。
その時点で御坂の最大の強みである手札の数が大幅に制限されている。

「バビバギダバ」

ろくに効いていない。

（まったく、自信無くすわね……）

「これならどうですか？」

椅子の脚にふれ、コウモリ男の右脚を潰そうと転移させる。
右足のパーツを押しつけて椅子の脚が現れる。

「グッ グググググ ガガ」

椅子の脚を引き抜き、白井めがけて投げる。
尋常じゃない速さで飛んでくる脚を回避した白井が見た物は

コウモリ男の膝だった。

「ごはっ……」

正面から直撃し、壁まで転がっていく。

「黒子！！」

「白井!!」

微妙にうめいていることから息はあるようだが、早く病院に連れて行かないとヤバイ。

「御坂…お前は白井を連れて逃げるじゃん」

「先生はどうするんですか？」

「命くらい賭ければ時間くらい稼げるじゃん」

「ダメです!!」

「早く行け!!」

「レンジグザ ガガガド ゴバサゲス」

コウモリ男が跳ぼうとしたその時

扉が開く。

月光をバックに立っているのは黒髪の少年
上条当麻。

「上条!」

「アンタ…なんで…」

呟く二人を身、続いて気絶している白井を見て、上条はコウモリ男を睨む。

「はなれろ」

「ン？」

「御坂達から離れろっつてんだよ！！
三下野郎！！」

叫んで突っ込み、右ストレートを放つが、まったく効かず払い飛ばされ上から椅子に激突するが、立ち上がる。

「こんなヤツらのせいで」

浮かぶのはクモ男や目の前のコウモリ男に殺された人達。

「これ以上誰かが泣くを見たく無い！」

泣いていた女性

「皆に笑顔でいてほしい！」

泣いているかもしれない人達。

「だから俺は、戦う！！」

「よせ！！」

御坂達と逃げろ！！」

黄泉川の声を無視して、上条は拳を握る。

「こいつらが誰かの笑顔を奪うってんなら……」

有りっ丈の怒りと

「誰かを悲しませるってんなら……」

決意と

「その幻想を」

想いをこめて

強く 強く握る。

「ぶち殺す!!!」

宣言しながら腹部に両手をかざす。

大事な人達を守りたいと

誰も傷ついてほしくないと願いながら両手をかざす。

それに伴い、神秘的な何かを放つベルトが現出し、何かが起こる前兆のような駆動音が響き渡る。

そして右手を眼前に伸ばし、構える。

（皆が笑っていられるならいくらでも戦ってやる）

左側に伸びた手を徐々に右側に持っていく。

（だから、こいつを倒せる力を俺にくれ!!!）

右手を瞬時に腰に持っていった左手と合わせ、コウモリ男に突貫す

る。

拳を、蹴りを当て、攻撃を回避し、殴り飛ばす。

そして、姿が変わる。

鎧のような胸は白ではなく赤に。

短かった角はより長く。

体から出る闘気はより強く

「赤く…なった？」

「当麻…なの？」

「ああ…おれだ」

言葉を返しながらも、上条はコウモリ男を睨みつける。

「クウガ…」

憎悪が籠ったその単語を聞き、感覚的に理解する。
今の自分の姿がなんなのかを

「クウガ…そうか、クウガか」

一人で納得し、コウモリ男に殴りかかる。

その一撃は白い時よりも遥かに重く、鋭い。

（これなら…やれる！）

「けど、その前に…」

御坂と白井と黄泉川をすばやく回収し、教会を出る。

「ちょっとあいつを倒してくるから、待っていてくれ」

「アンタ…やる気なの？」

「やるって決めたからな」

「そう。」

だったら必ず帰ってきなさい。
さもないと地獄の底まで追いかけるから」

「わかった。必ず帰ってくる」

買い物に行くかのような気楽な声で。だが確かな決意を込めて、クウガは教会を向く。
その瞬間、飛んで来たコウモリ男にさらわれ、一緒にスーパーの中に突っ込んでいく。

（おちろっ！）

クウガは思いっきり腹を殴り、コウモリ男を叩き落とす。

「おらっ」

先生の右拳を打ち、左回し蹴りを決め、左足をかかわす。

いけると確信したその時

「ゴオオオオオオオオオオオオ」

ターザンのように糸に捕まりながらクモ男がやってきて蹴り飛ばされる。

「くっ」

（よりによってここにきやがった）

一対一なら大丈夫二対一ならかなり危ない三対一なら迷わず逃げろの路地裏ルールの考えても危険なのに、人間を腕の一振り殺せる化け物だと何倍も危険だ。

正直逃げた方が安全だが、逃げれば今以上の被害が出るのは目に見えている。

（まずは片方を倒す！）

クモ男に殴りかかるがコウモリ男が横から邪魔をしてきて、その隙にクモ男が糸を吐いてくる。

それをしゃがんで避けながらコウモリ男の足を払い、立ち上がる反動を利用してクモ男に接近して肩をぶち当て、子を描くように右拳を捻りこむ。

追撃しようとしたところをコウモリ男に後頭部を殴られ、仰け反った所をクモ男に蹴られ、コウモリ男に殴られる。

（やっぱ二対一はきついな。

せめて正面だけで相手に出来る場所に行かないと）

だがクウガがいるのは商品棚の真ん中あたり
ある程度は制限できるが、正面だけに捕らえたいのが本音だ。

（ヤバイ。結構ヤバイ）

攻撃をかくぐりながら反撃するが、こっちの方が受けるダメージが多い。

「ルン！」

クモ男の拳で入り口の方に飛ばされる。

（まけ……るか——）

その時、スーパー内の電灯が片っ端から点灯する

「アアアアアアアアア」

光に弱いコウモリ男はもだえながら飛んでいった。

（なんだか知らないけどこれならいける！）

クウガはクモ男の腹を殴り、くの字に折れたところを天井めがけて
投げ飛ばす。

クモ男は天井を突き破って屋根の上に落ちる。

クウガは出来た穴を潜り、逃げようとするクモ男を捕まえて殴る。

がクモ男がカウンターの肘をねじりこんできたため、のけぞる。

「ドゾレザ」

「!!」

クモ男は右の爪を伸ばして突いてくる。

クウガは腕をすばやく掴み、軽く跳んで両足で連続で蹴り、クモ男を引き離す

（くそっ！

どうやったら止まるか全然分からない！！）

手ごたえから見ても十分すぎるのに、クモ男もコウモリ男も止まらない。

どうすればいいか考えていると腹辺りを押さえて苦しみだした。

「グ　グググ」

（なんだ？ 様子が変わった）

警戒しながら距離をとる。

「ググ」

手を離すと、顔のような紋章が燃えるように浮かび上がっている。

「グググ」

亀裂のような物が広がり、ベルトに伸びていく

亀裂がベルトに届き、ひび割れると共に

「グオオオオオオ」

クモ男は爆散した。

「上条!!」

「当麻!!」

黄泉川と黒子を背負った御坂がやってくる。
クウガは二人の方を向いて

「言っただろ——」

そう

「必ず帰ってくるって」

言った。

Episod 3 始動(前書き)

盛大にやりすぎたから色々なおしました

Episod 3 始動

10..24 第七学区 アンチスキル分署

黄泉川は昨日の件で上司から詰問されていた。

「なぜひとりで向かったのか説明してもらおうか」

「はい。情報源が飲んでいた男だったために確証がなかったことと、本当だった場合、人員を集めれば逃げられる可能性がある判断したからです」

「なら超能力者とはいえ一般人を同行させた理由は」

「彼女は誰かが危機に陥るなら自分を省みないタイプの人間です。そんな彼女が素直に帰るとは思えないし、たとえば白井黒子に転移させたとしても確実に追ってきます。」

ならいっそのこと、近くにおいておくのが妥当と考えました」

「——なんにしろ独断専行と生徒を危険な目に合わせた罰は受けないといけない。」

君には一週間の近親処分を受けてもらう。

それと、帰る前に事務所に行ってくれ。

君の分の資料があるから帰り次第目を通しておいでくれ」

「わかりました」

12..31 第三学区 ビル前

男がいた。

こんな寒い中にもかかわらず、上には肌の上に皮製のノースリーブのジャケット1枚、首には赤と迷彩色が入り混じったマフラー、だらしなく着こなした枯れ草色のパンツ：

そして細身であることが彼を見る物全ての寒さを増徴させる。

そして、特徴的なのが、時代錯誤的なアフロヘアと顔の刺青、そして何か狩りをしているようなギラついた目つきだった。

「ボボバ ゲゲルボ バギガギダシヨバ」

そう言って男は不快そうな顔をし、ビルの中に入った。

第十一学区 交差点前

そこにも男がいた。

前述の男と似ている格好だが、筋骨隆々、髪は短くトップで逆立つように纏められている姿はスポーツマンを彷彿させるものであった。彼は何かを探すように、周囲を睨みつけながら辺りを練り歩いている。

車のクラクションや、エンジン音を聞いたたびに、その表情はより激しく憎悪のこもったものとなっていく。

彼の纏っている物は分かりやすく言えば“殺気”だった。

しかし、それは漫画やゲームに出てきたりする達人が放つそれと違いとても動物的なモノ。

それに威嚇され、彼の周囲に人は近寄って来ようとせず、そこに縄張りが出来上がっていた。

第六学区 遊歩道交差点前

そこにも男がいた。

しかし、前述のような格好はしていない。

肌の上から…という点では変わりないが、銀と黒、2色の斑模様のノースリーブのジャケットを羽織り、黒革のパンツをはいている。時期が時期ならば、普通に街中で見かけそうな若者向けの服装をしていた。

針のようにツンツンに伸ばした髪の毛は銀色に染まっており、唇は赤黒く塗られている。

その唇を愉快そうにゆがめながら、彼は交差点を行きかう人々の「口元」を凝視する。

交差点を往復しながら、聞こえてくる会話を”聞く”のではなく“見る”。

そして、彼はそれを見終わったら、嬉しそうに舌を伸ばして自慢げに動かすのだった。

12…41 第八学区 黄泉川家

黄泉川は昼を食べながら資料を見ていた。

不鮮明な写真に写った化け物、クモのような化け物の写真、コウモリのような化け物の写真、そしてグラフが大きく写っている。

「先の三件（十八学区に遺跡、分署、七学区の教会周囲）の事件を引き起こした怪物を未確認生命体と命名」

（こりゃSFじみてきたじゃん）

そう思いながら資料に目を通す。

「未確認生命体から排出された弾丸を基に鑑定した結果、第一号の対組織や体液の成分は人間と酷似している事が判明。この件に関しては別部署と平行で調査を行う」

流石に驚きを隠せない。

もしかしたら自分を守るべき対象に銃を向けていたかもしれないと思うと恐怖もこみ上げてくる。

それを押さえながら資料に目を通していく

「第一号は3月22日に第四号との戦闘により、死亡が確認された。恐らく仲間割れだと思われる」

赤い鎧を纏った姿の上条の写真が写っていて、その下に四号と書かれている。

「第2号。この画像では不鮮明だが、1号や3号と腹部の装飾品が若干異なる。

ただし第四号と外見の特徴が似通っているため、何らかの関連性があると仮定する」

白い姿の上条（仮）の写真が写っている。

「第三号及び第四号との戦闘後、両者ともその後の行方は分かっていない」

ページをめくる。

画質が粗く、細かな輪郭までは選別できないが、それは人間の姿ではないということが分かる生命体の画像が2枚、並んで映っていた。

「外部の警察から送られてきた謎の影。

この2つを未確認生命体と断定。

そして遺跡から出てきた者を便宜上第0号と呼称すると、未確認生命体は計7体存在することになる」

犀のような化け物と豹のような化け物の写真が写っている。

（あんなのが…あと最低二体いるって…最悪じゃん）

聞いた話では奴らは超電磁砲も効かない化け物らしい。

一方通行なら勝算はあるが、巻き込みたくないから却下。

上条のあれなら倒せるだろうが、同じく却下

つまり、未知の化け物（仮）を警備員と風紀委員だけで倒さないといけないことになる。

「報道規制は継続。

各風紀委員及び警備員は極力極秘で捜査に当たり

未確認生命体を発見し次第

問答無用で射殺せよ」

「!!」

未確認生命体を射殺せよ。

つまり、上条も攻撃対象ということになる。

黄泉川は二号及び四号の安全性を証明しようと立ち上がるが、同時に証明できないと気付いてしまう。

「とにかく、上条に連絡しないと」

家にはいない。
なら

「小萌先生」

〈何でしょうか黄泉川先生。私はこれから優雅なランチなのですが〉

「上条はまだ学校にいるか？」

〈えっと…今はお昼ご飯を食べてると思います〉

「じゃあ伝言を頼みたいんだけど…」

〈なんですか？〉

「絶対にアレになるな。こっちが片付けるからあいつらにはかかわるな。以上じゃん」

〈なんだか分かりませんが分かりました〉

「ありがとうじゃん」

電話を切った黄泉川は家から出る。

（聞いたとしても上条は確実ににかかわってくる。
明るいうちに3号を発見して倒す）

P M 00..32 第七学区 学校（屋上）

「カミヤん、一体どうしたんだニヤ〜？」

「別に、ただ考え事してただけだ」

「そ〜かそ〜か……殺ししまった事を考えてるなら、相談に乗れないぞ」

「!？」

上条はぎよつとする。

「オレは一応裏側の人間なんだぜい、これくらいはお手の物だにやー」

「そうか……」

「相談にはのれないけどアドバイスなら言ってやる」

（アドバイス？）

「オレは舞夏を守るためなら誰かを殺す事もだます事もためらわない。」

迷ったら死ぬのはこっちだからな。

だからカミヤん、死にたくなかったら迷うな。

それに……友達が死んだら、俺だって泣いちゃうにや」

「……ありがとう」

「ただし某負債みたいになったらせめてもの友情で抹殺してやるぜい」

「そこまでひどくはならねえよ」

P M 0 3 .. 5 4 第四学区 飲食店街

(探すのはいいけど、よく考えたら手がかり0じゃん)

現在謹慎中の黄泉川は警備システムを利用することは出来ないし、こうしてる今も人ごみを利用したりなどして監視の目を潜りながら動いているからなかなか進まない。

(やっぱり全学区風潰し出探すしかないじゃんよ…流石に憂鬱じゃん)

頭を掻きながら歩いていると、人にぶつかる。

「すみません」

「ギジャバビ ゴギザ」

額に白いバラのタトゥーが刻まれ、黒いドレスのような服を着た女は嫌悪がこもった表情で一瞥しながら奇妙な言葉をつぶやき、去っていく。

外国語とは全く違う何かをはらんだ言葉に黄泉川は引っかかりを感じる。

「すみませんが、今なんていったじゃん？」

前に回りこんで警備員の証明書を見せながら聞く。

「……」

だがバラのタトウの女は沈黙を貫く。

「何とか言うじゃん」

「！」

女は黄泉川を払いのけて走る。

「待つじゃん！」

黄泉川も追いかける。

バラのタトウの女はヒールが高い靴を履いているのに黄泉川並みに速い。

人の間を抜け、階段を駆け下り、路地を曲がったバラのタトウの女を追いかけるが、何かが顔に向かってくる。

とっさに顔を腕で庇ってしまい、足が止まる。

路地の向こうには誰もいなくなっている。

足元に落ちていたのは

「バラの…花びら？」

路地を出るが、バラのタトウの女は見えない。

周囲を見渡すと、結構遠いところにいたが、見つけた。

（あいつが未確認に関係あるかどうかはわからないけど、とりあえず追うじゃん）

バラのタトウの女は人がいない工場の中に入る。
暫く歩いていると、逆さになった布を体に巻いただけの男と出会う。

黄泉川も一足遅れて工場を見つける。

入ると、バラのタトウの女と男が会話しているのが見え、銃を抜いて身を隠す。

「ダダバダダゴグレ　ダ　クウガ」

「ゴグザ　ババジ　クウガ　ゾギダレツゲダゼ」

淡々と喋るバラのタトウの女に男は自慢げに話す。

バラのタトウの女は男の頬に手を添え、いきなり額に手を置いたかと思うと、手から出てきた蔓のようなもので頭を締め付ける。

「ア　アアアアア　アアッ」

頭をつぶさんばかりの力で暫く締め付け、放す。

「リンバ　ボボバガヅラデ　デギス」

「ボボ？」

「ガクエントシザ　ミヨグバリントガ　ギスラヂザ」

そう言ってバラの花びらを手渡す。

「ゴロギソギ　ゲゲルバ　デビゴグザ」

「ヂバグ」

やる気満々の男に、バラのとタトウの女は言い放つ。

「デガバ シグガスボザパセザン グロンギ」

（なんて言ってるか分からないが、あいつらがここに用があるのは分かったじゃん）

もう暫く様子を見ようと思っていると、
ポケットに入っていた携帯電話がバイブで落ち、落ちていた空き缶にぶつかり、良い音が鳴った。

（しまった！）

音を聞いた二人がこっちを向き、男の方が向かってくる。

黄泉川はとっさに後ろに下がりながら発砲。
だがあわてて撃ったのもあって弾丸は男の頬を掠めるだけ。

「ちっ…」

もう一步飛び退いて地面を蹴り上げ、砂利っぽい土を顔面にぶつける。

「グッ」

砂が目に入ったのか男の動きが止まる。

（とりあえず、動きは止めさせてもらおうじゃん）

すばやく銃口を下に向け両腿を撃ち抜く。
だが

「なっ…」

そんな物お構いナシに男は接近し、左手で銃を幸を掴み、右手で首を掴んで持ち上げる。

（弾丸は貫通した…なのに何で効かないじゃん!!?）

開いている手で予備の銃を取り出し、右腕を撃つ。

（な…）

穴が開いた右腕が瞬く間に再生する。
見てみると頬の傷もなくなっている。

（まずい…やられる!!）

男の手の力が強くなっていく。

「ガギデビグスバ　ギラパ」

バラのタトウの女の言葉を聞いて、男はつまらなそうに黄泉川を軽く抛る。

（何で…生かしたじゃん?）

疑問を残す黄泉川を尻目に、二人は何処かに去っていく。

追っても自分一人では勝ち目はないし、人を呼ぶためも兼ねて黄泉川は携帯をとる。

「こちら黄泉川、何のようじゃん、鉄装」

〈今度配備される新型の試作品の取扱説明書を忘れてましたよ〉

「そんなもの近親解けてからでいいじゃん…」

死にかけた理由がこんなのだと、なんかいやな気分だった。

17・40 第十五学区

学園都市で一番にぎわっていると言っているこの学区にも、人が寄り付かないような区域はある。

そして人の数に比例してこういう場所に集まる人種も増える。

その区域で、女性がたった一人で廃ビルの壁面に体を預け、辺りを見回している。

ホットパンツ、ノースリーブ：身につけている着衣は黒で統一されており、髪は色とりどりの髪留めで数本ずつ纏められている、ドレツドヘアーのようなもの。

気だるそうに辺りを見回しているが、露出している太ももや二の腕等の筋肉は引き締まっていて、モデルのような体型だ。

そんな彼女の前に、一台のバイクが止まった。

マフラーを改造しており、けたたましいエンジン音を鳴り響かせたまま、後ろに乗っていた男が降り、もう片方もヘルメットを外す

一人は老け顔男、もう一人は貧弱そうな顔つきをした性だ。

老け顔の男の方がまじまじと女性を眺め、興奮した声を上げる。

「っほー！いい体してんじゃねーの！」

品のない笑いを止めようともせず、そのままバイクを降り、彼は女性へと小走りで駆け寄る。

貧弱そうな方は“始まったよ…”的な表情でハンドルに体を預け、止めようともせず、呆れた表情でその様を眺めていた。

「タトゥーなんかしちゃってさあ」

男は顔を女性の太ももに近づけ、トラの顔のようなタトゥーが刻まれた脚に触る。

そして次の瞬間――

老け顔の男は女から見て奥のビルの7階ぐらいの高さまで蹴り飛ばされた。

「――は？」

啞然とした貧弱そうな男は後ろを見ると

口元がひしゃげ、壁に叩きつけられて後頭部が碎けて脳味噌がはみ出ている男の死体が引っかかっていた。

（ばけもの……）

そう思うが早いか男はヘルメットをするのもおざなり、バイクのアクセルをかける。

「うあああつあああはあああ!!」

そして悲鳴と共に、その場を去る。

その悲鳴を心地よいもののように聞き届けると女性は身体を（すがた）を変える。

その姿は豹を彷彿させるようなしなやかな筋肉で覆われている。

しかし、鋭く爪は尖り、肌の色も黒く、顔も人間のそれとは大きく異なる、異形そのものだ。

髪型には人間の頃の名残か、ドレッドヘアーのままではありアンバランスな外見をしているが、

逆にそれが彼女の姿の不気味さを際立たせていた。

彼女：いや、未確認生命体第五号は準備運動をするようにその場で軽くジャンプし、足首を回す。

そして、男性が去って行った方を見ると腰をかがめ力を溜め

「…」

何も言わず息を吐き、その貯めた力を一気に解き放った。

その勢いは弾丸と形容するには余りにも荒々しく、そして砲弾と形容するには余りにも鋭いものであった。

17..58 第七学区

上条はバーゲンセールで見事に勝ったおかげで上機嫌だった。

「はーこんな豊作なんて上条さん史上類を見ないんですよ。
……御坂の電撃でオシヤカになりませんように」

インデックスがうるさいだろうから歩調を上げる。
曲がり角を曲がったそのとき

「うあああああああああああ」

悲鳴が聞こえてきた。

（やっぱり不幸イベント発生じゃねえか！）

行ってみるとそこには、豹みたいな化け物に襲われている

（まだ……いたのかよ！）

だが考えるのは後。

今は目の前の人を助ける事に集中する。

「おらあっ！」

中身たっぷり買い物袋を横っ面目掛けて投げ、続いてタックルを決める。

「早く逃げろ！」

男はコクコクと頷いてどこかに逃げる。

豹のような化け物 第五号は上条の首をつかんで壁に向かって投げる。

背中を思いっきりぶつけ呻いている所を再び投げられる。

「いっほっ・・・」

警備員の部隊が上条たちがいるところに向かってきている。

「相手は得体の知れない連中なのでとりあえず射殺してくださいのことです」

鉄装の連絡が各車に渡った。

上条は激突の衝撃で喪失した酸素を三呼吸で取り戻す。

（考えるのは後だ！とりあえずこの場を切り抜ける！！）

自分が殺す云々の前にとりあえず殺されない事を優先する。

両手を腰の前にかざす。

あられたベルトのようなものを見て第五号はギョッしたかんじになる。

上条はその間に立ち上がり、右手を左側に伸ばして右側に持っていく。

「変身！」

右手を左腰に置いた手に合わせた瞬間、第五号が上条を突き飛ばす。

だが運がいいことに壁際に置かれていた瓶ケースの山に座った状態になる。

襲い掛かる第五号を両足で蹴ると同時に足が変わる。

右拳で殴るとともに右腕が変わる。

続いて立ち上がりながら肘打ちを決める。

そうしている中で上条はクウガに変わる。

「1つ聞きたい。

お前らは、何であんな事をする。

なんで人を殺す」

両腕を大きく広げ、腰を深めに落とすという独特の構えをとり、左に動く。

第五号は無言で右側に動く。

「答えろ!!」

そのとき、サイレンの音が聞こえてくる。

「「!!」」

二人がそっちを見てみると、装甲車が向かってくる。

装甲車が止まると同時に、中から警備員達が出てきて隊列を組んでマシンガンを構える。

「こちら桜井、第七学区大栗薬局裏で第五号を発見。さらに第四号もいます」

（四号とか五号って何だ!!?）

どうもこの姿になると耳もよくなるみたいで、不穏な会話が聞こえてくる。

だが第五号は空気を読まずに攻撃してくる。そうしている内に増援がやってくる。

「一体でも厄介なのにもう一体かよ……

こっちは四号をねらう。

残りは五号を狙え！」

警備員達は、第五号とクウガに銃を向けた。

Episode 4 疾走

「撃てえ！」

銃弾の雨が第五号とクウガめがけて発射される。
うっとうしく思ったのか第五号は警備員の方に向かっていく。

（やめろ！）

それをクウガは腹に腕を巻きつけるようにタックルを決め、引き離す。

その間も銃弾は放たれる。

そして――

3. 25 9..43 黄泉川家

「四号と五号が射殺された！！？」

鉄装に連絡を入れた黄泉川は驚くしかない。

「私も現場にいたから間違いはないと思うんですけど――」

「思う？」

現場にいたのに生死が分からないのは少し変だ。

「信じられないと思うんですけど、竜巻に襲われたんです」

「ハア？」

意味分からない。

「二匹を攻撃していたらいきなり竜巻みたいな風に襲われて周りが見えなくなっただけです。」

「見えるようになったと思ったら――」

「消えていたと」

黄泉川は嬉しそうな顔をする。

「はい。詳しいことがわかり次第連絡します」

十数分して返って来た連絡によると、四号も生きているが、五号は右目を負傷したらしながらも逃走。

カメラの処理速度を上回るほどの速さで動く五号の捕捉は困難なため直接追いかけるしかないが、それもまた困難なため

『トライチェイサー 2010』の試作機を使用することになったらしい。

電話を切った後はどう動く考えていると、電話がかかってきた。番号は非通知だ。

「はい、黄泉川です」

黄泉川は外を警戒しながら応える。

電話の相手は

「始めまして。統括理事会の貝積継敏です」

予想外にもほどがあった。

3. 26 第七学区 公園

「おいっす御坂」

「アンタ…また戦ったみたいね」

上条はぎよっとする。

「何でそれを！」

「私を誰だと思ってんの？」

「ビリビリ電撃暴力女」

発射された雷を右手で防ぐ。

「よけんな！」

「死ぬわ！」

いつものやり取りを数分続ける。

「と　とにかく、私の能力をチョット使えばこれくらいの情報はすぐに分かるわよ」

「そっか……何か分かったら教えてくれ」

「人に撃たれたのにまだ続けるの!!?」

「その事なんだけどさ、あたってもチクチク痒い位だから問題ねえよ。」

むしろ後三倍はもってこいって感じ?」

「もし死んだらどうすんのよ!」

「死はない」

「え?」

「絶対に死はない。」

皆の幻想を殺しつくすまで死ぬ気はないし、絶対に皆を泣かせない。だから死はない」

「……」

「大丈夫だって、今まで何とか生きてきたんだしさ」

「でも……」

「それじゃあ俺補習があるから、じゃあな」

「ちょ……」

引きとめようとするが、上条は恐るべき速さで去っていった。

見回りをしていた風紀委員の男は、橋の下にたまっていた黒い跡の
ようなものを発見する。

いそいで降りてみると、そこには鈍く光何かが落ちている。
拾ってみるとそれは銃弾だ。

（スキルアウトの抗争でもあったのか？）

だがそれにしては争った形跡は一切ない。

「それにこいつは…」

黒いの跡：恐らく血痕は闇の中に続いていて、どこまで続いている
か分からない。

（この前連絡があった未確認とやらじゃないだろうなあ…）

もらった資料を見ても信じられないが、それが現実らしい。

「——いくらか見に行くか」

そう言って風紀委員の男は腕章を付け、右手から火の玉をだして血
痕を追う。

20mくらい歩くと、跡が途切れている。

（——帰るか：僕みたいなへっぴこが）

後ろから物音がした。

「!!?」

恐る恐る振り向くが、何もいない。

ほっと溜息を付いて首を元に戻すと――黒い化け物がいた

「うわぁっ!!」

黒い化け物――第五号は男の首を掴んで右側の壁に押し付け、左手の鋭い爪を

脳まで届かんばかりの勢いで男の左目の伸ばした。

そして第五号は疾風のような速さで走っていく。

そして地下通路のような場所に着くと、合計4人の男女に会った。

いたのはバラのタトウの女、銀髪の男、筋骨隆々の男、そして……黒い服と黒い防止と黒い傘を持っていたように青白い顔の男だ。

「メビオ!」

筋骨隆々の男は怒ったような声色で叫ぶ。

「ボンレン セギゾ グスザ ベザ」

そう言って第五号は四人の間を抜けて去っていく。

「メビオ!!」

「ラデ ログギギ」

銀髪の男が止めに行こうとするのを筋骨隆々の男が止める。

「ゲゲルゾ ザジレスゾ」

そうやってバラのタトウの女は何処かに歩いていき、残る三人もそれに着いていった。

P M 02..22 第七学区 道路

「未確認生命体第五号は第七学区大宮宮（第七学区最大の宿泊施設）方面へ逃走中。」

ただしあまりにも速くて追跡が困難！」

へ了解。そちらに検問を張って食い止める。そちらは可能な限り追跡してくれ」

「了解」

超スピードで突っ走っている第五号が上条の近くを通り過ぎる。

「今のって——」

続いてやってきたバイクが横切ろうとするトラックを避けようとしてコンビニのガラスをぶち破る。

「!!」

上条は慌ててコンビニの中に入り、警備員の人の様子を診る。

「大丈夫ですか!!?」

「も　問題なぐガアッ」

警備員の人の足が変な方向に曲がっている。

それを見た上条は

「だれか救急車を呼んでください!

あと……これ借ります」

上条はバイクの状態を確認しながら押していく。

幸いというか当然というか分からないが見た感じ動かすのに問題はない。

ちなみに上条は運転免許なんて物はない。

だが問題はない

なぜなら

「必要なのはカードじゃなくて技術……だったよな」

というわけだ。

騒ぎが起こっているほうへ走らせると、そこは惨劇の舞台だった。

周囲は窓ガラスは割れ、壁は碎け、車のボンネットはエンジンごと潰されているなど凄まじい状態になっている。

そしてその周囲には目玉を抉り取られ、首がへし折れ、胸や腹を貫

かれた死体がいくつも転がり、その中央に第五号が悠然と立っていた。

「デメエ……」

上条の怒りに反応するようにベルトが現れる。

第五号は上条を見つけるが、さっさと何処かに向かおうとする。

アクセルを回し、追いかけるが、第五号は橋の上までジャンプする。

上条も追いかけようとするが、後輪が階段に引っかかって上れない。第五号は、その間に何処かに行った。

「クソッ……」

バイクを降りて自力で追いかけようとするが、

「公務執行妨害及び窃盗で逮捕ですの」

突然現れた白井に手錠をかけられた。

「まったく：お花を摘み終わったと思ったら貴方が盗んだバイクで走り出したというではありませんか。

おおかた未確認を止めようとしたんでしょうが、貴方は一般人ですの。

全く：お姉さまといい貴方といい自分の立場を多少はわきまえて欲しい物ですわ」

などとグチグチ言っていると、白井の携帯に電話がかかってくる。

「はいこちらしら————どういふことか説明してくれませんか？
彼が必要？」

一体それは――わかりました。

後日お話を聞かせていただきます」

電話を切り、何処かになおし、仏頂面で電話を切る。

「権力の圧力というのを初めて身で受けました」

何が言いたいか良く分からない。

「とりあえず、あなたはこれから警備員の本部に向かってください。ここから五分も走れば付きますわ」

「何ゆえ？」

「統括理事会の貝積継敏の代理がよんでいますわ」

P M 02・31 警備員本部

「久しぶりだね、上条」

まだ寒いにもかかわらずへそだし半袖のセーラー服を着ている女、雲川芹亜は声をかける。

「お久しぶりです、先輩。 とうかなんで先輩が？」

「貝積継敏の代理ってわけだけど？」

「へへへ」

「驚かないのね？」

「なんていうか、

先輩だと魔法使えてもモーマンタイな気がしてますから」

「ちょっとざんねん。」

「っていうか先輩って今大学生ですよね？」

「ああ、キャンパスライフってのもわるくないな。
お前にもオススメするけど？」

「じゃあなんでセーラー服なんですか？」

「私服買うのがめんどくさいし、こっちの方がお前の好みだろうか
らな」

「かかか上条さんはセーラー服フェチじゃありませんのことよ」

「わかってるよ……まあ冗談はこれくらいにして、お前に一つ提案
がある」

「提案…ですか？」

「お前が貝積の傘下に入れば可能な限りのサポートをしてやれる。
お前のあれを能力扱いにして警備員から狙われなくすることだって
出来る。」

魅力的だろ？」

この提案はあくまで上条を守るための物。

貝塚にとってもそれ以上の意味はないし、それ以下の目的もない。
傘下に入れるのは雲川の独断だ。

この男はなるべく近くにおいておかないとどう動くか分からない。
正直闇の中に引き込みたくないが、このまま放っておけばもっと深く
てたちが悪い闇の中に引き釣り困れるのは目に見えている。

（まあ……アレに目をつけられてる時点であまり変わらないんだけ
ど……）

自嘲気味に笑って答えを待つ。

「いりません」

「……なぜ？」

「俺が勝手にやるって決めたことに他人を巻き込むわけにはいかな
いじゃないですか」

「また狙われるよ？ それどころか裏の攻撃祭りになるかもしれない
けど？」

心底面白いといった感じの表情で聞く。

「そんなときはそんなときですよ。
全力で逃げ延びるだけです」

「最後に聞くけど、未確認とやりあう気は？」

「必ず止めます。」

あいつらのせいで誰かが泣くのは、もう見たくありませんから」

「――やっぱお前を見てると退屈しないな。
中に入ったら地下三階に行つて。そこに黄泉川がいる」

「黄泉川先生が？」

雲川は通信機のような物を取り出し、相手に向かって話しかける

「貴方も知ってるだろうけど言わせてもらおうよ。

この子はやるって決めたらやりきるまで死んでもやめないタイプだ
けど」

「……わかつてるじゃん」

会話の主：黄泉川は無然とした声色で話す。

「私も貴方が彼を戦わせたくないって気持ちは分かるけど？」

「それでもお前は利用するじゃないか」

「私だって生きたいからね、使えるものはなんでも使うけど」

そう言つて電源を落とす。

「とりあえず行つて来ます」

「死んだら泣いてやるから死ぬなよ」

「分かってますよ」

上条はエレベーターで降りると、黄泉川が立っている。

「もう一度だけ確認するじゃん。
お前は続けるのか？」

「最後までやりますよ。
あいつらを殺さないで皆を守る方法を見つけるまで、絶対にやめません」

上条の決意は絶対に揺らがない。
それを改めて理解した黄泉川は

「ついてくるじゃん」

自分ができることをやる。

しばらく進むと、倉庫のような場所に着く。

「暗いんですけど」

「ちょっとまつじゃん」

黄泉川は電気をつける。

いきなり明るくなって目がくらむ。

目が慣れると上条の目の前に、銀色に光るバイクが置いてあった。

「トライチェイサー2010。

量産化の都合上使えなかった機能を備えた新型機じゃん。
バトルモード

戦闘形態になると人間じゃ扱えなくなるらしいけど、お前なら大丈夫じゃん」

「使わせてもらいます」

またがってハンドルを握ろうとするが、アクセルレバーがない。

「こいつを使うじゃん」

持っていたアタッシュケースからグリップを取り出し、セットする。

「おおっ！これなら盗まれる心配はなさそうですね」

「第五号は十九学区にいる

私も後から向かう。行って来るじゃん」

「行って来ます」

またがりながら構える。

「へん　しん！」

クウガに変わるとともにアクセルを回し、通路を登り、第五号がいる場所に向かう。

P M 0 2 .. 4 0　第十九学区　廃工場付近

第五号は周囲を警備員に囲まれながらも圧倒していた。

縦横無尽に跳び回り爪で切り裂き、拳で打ち据え、牙で引き裂く。

（ムムムリデス！！このままじゃ私達は死んじやいます！！）

鉄装は軽いパニックに陥っている。

そんな鉄装に第五号は近づき、払いとばす。

「アグっ…」

「ゴセギビリヨグレゾ ジャデデジャスレ」

（なんだかよく分からないけどダメ！！）

量目を潰そうと伸ばしてくる指を必死で止めるが、普通に力負けし、近づいてくる。

（この前合コンでいい日と見つけて明日会う約束までしたのに！！
やっぱりこういうのって死にフラグなの～～～！！？）

指があと一センチまで近づいたその時

凄まじい排気音と共にクウガが体当たりを仕掛けようとする。

だが第五号はその前に跳んでさがる。

「よ…四号…！！？」

クウガはトライチェイサーから降りて鉄装に近づく。

「ひっ…」

悲鳴を上げる鉄装に

「大丈夫ですか!!?」

「へ?」

クウガは一言そういう。

鉄装はいまいち事態を把握できない。

(とりあえず、誰もいないところに…)

クウガは第五号のほうをむく。

「フン　ブスバサボギ」

第五号はそう言って跳躍する。

(待て!!)

アクセルを全開にして追いかける。

瓦礫を飛び越え、建物の中に入る。

前輪で顔を叩こうとするが避けられ、上の階に跳ばれて壁に叩きつけただけになる。

クウガは前輪を接地し、近くの階段を上る。

床の隙間も華麗な機体操作で難なく進み、最上階にたどり着く。

(絶対に逃がさない!!　ここで：倒す!!)

第五号排気を荒く吐き、クウガはブレーキをかけながらトライチェ

イサーのアクセルレバーを何度も回す。
数秒間呼吸音と鋼の馬の嘶きが響き渡り――

猛スピードで接近しながら顔面を潰さんばかりの勢いで前輪を持ち上げる。。

第五号は左に動いて避ける。

「おらああっ！！」

クウガは前輪が着地する勢いを利用しながら思いっきり機体を右に捻る。

結果、前輪を軸にコンパスのように回転し、後輪が第五号の横面を打ち、15mほど転がる。

さらにクウガは設置と同時にその場で旋回し、前輪を持ち下ながら第五号めがけて発進し、一気に振り下ろす。

だが第五号は転がって避け、トライチェイサーを蹴る。

クウガは思わず踏ん張ってしまい、動けない。

第五号の駄目押しでの一撃でトライチェイサーは倒れ、左脚が挟まる。

「ビガラボ レゾジョボゲ」

「ぐっ」

マウントポジションを取って左目めがけて飛んできた抜き手を避け、右足でトライチェイサーを押しとばし、巴投げの要領で第五号を引き離す。

立ち上がり、構えると共に警備員の人達がやってくる。

黄泉川も鉄装もいる。

「二匹ともいるのか!!」

警備員の一人はハンドガンを抜いて発砲する。

弾丸はどちらにも当たらず、近くに転がっていた塗料の缶に命中し、爆発する。

さらに誰かが何か隠していたのか燃え方が尋常じゃない。

「くそっ!」

「待つじゃん!!」

黄泉川が撃とうとする警備員を止める。

「オイ!!」

「お願いします」

鉄装もとめる。

(とりあえず、こいつを引き離す)

互いに円を描くように動く。

先に動いたのは第五号。

第五号は体を深く沈め、刃のように鋭く接近し、クウガの腹を引き裂こうと腕を振り回す。

クウガはバックステップで避ける

(これで!)

第五号よりも低い体勢で接近し、右のアップで体を浮かせ

（どうだ！！）

右足で胸をける。

第五号は胸に紋章を刻みながら飛んでいき、壁を突き破り――

「アアアアアアアアアアアアアアアア」

爆散した。

そんな光景をどこからか見ている影が1つ。

「奇妙な化け物に奇妙な姿になる少年やはりこの町は面白い」

影はそう呟き、何処かに立ち去った。

Episode 4 疾走（後書き）

影の人は次あたりにも出てきます

機体、オリキャラ等説明（随時更新）（前書き）

ここでは登場する機体やオリキャラの説明をします。

機体、オリキャラ等説明（随時更新）

トライチェイサー2010

外見は原作のトライチェイサー2000と変わらないが、学園都市の超技術が無駄に盛り込まれているため

最高時速は400kmを軽く越え、無茶苦茶な機体操作にもメクラスの攻撃にも耐えられる。

いかなる場所であろうとも犯人を追跡し、追い詰め、蹴散らすをコンセプトに開発されていて、ノーマルモードとバトルモード（色変化＋最高馬力の増加）がある。

製作者が調子に乗りすぎたせいでバトルモードは人間では扱えないくらいの出力になっているため、現時点では実質クウガ専用機扱いになっている。

ちなみに燃料は金属燃料電池。

Episode 5 変化

3. 30 学区 ???

周囲が巨大な水槽のようなカフェのなかに、奴らはいた。その中のライターのふたを開けたり占めたりし続ける男は

「ジュンヂパ ドドボダダバ」

問いのような響きを含んだ言葉をバラのタトウの女に投げかける。

「ゴソゴソザジレス ゾ バヅー」

バラのタトウの女はバッタのような化け物にさういう。

「ビベンゲデビ バ バグドムセギジャジャバ」

バッタの化け物はうれしそうにいう。

「ドググビゼゼ バギング バギンビンザ」

「バギング バギンビンザゾ」

黒コートの男、第三号は挑発するように話すが

「フン サブショウザ」

バッタ人間は自信満々そうにさういい、バラのタトウの女の前に立つ。

バラのタトウの女は指にはめてある牙のような物が付いた指輪の牙の部分をバツクルにあたる部分にかざし、鍵を開けるような動作をする。

バツタ男——未確認生命体第6号はアフロの男の姿になり、何処かに行った。

7..40 第七学区 上条家

上条とインデックスはニュースを見ながら朝食をとっていた。

ニュースの内容は、『未確認生命体の存在を警備員が公認』といったものだ。

「なんだか大変なことになったね、とうま」

「そうだな……」

何とか戦わない方法を見つけないが、あいつらが何なのかも目的が何なのかぜんぜんわからないから、話し合いの仕様がなない。

それ以前の問題で会話できるかどうかすらわからない。
ようするに

（前途多難だな…）

そんなかんじで上条がブルーになっていると、インターホンになる。

「は〜い。新聞の勧誘ならその勧誘をぶち殺しますよー」
げんそう

「期待に添えなくて悪かったな」

外には黄泉川がいた。

「何で先生が…まさか私を解剖するために!!」

上条は身構える。

「んなわけないじゃん。」

お前を病院に連れてくために決まってるだろ」

「病院？俺っていたって健康体なんですけど」

「——あんな姿になれるやつのが健康体じゃん。
不自然の巣窟の間違いじゃん」

反論できない。

「とりあえず、行くじゃん」

黄泉川は上条を引っ張っていった。

10..25 病院

上条はCTスキャンを受けていた。

「ふむ……」

画面を見ていたカエル顔の医者は少し驚いた顔をする。

「まったく：彼の体はファンタジーだけど、よりいっそうファンタジーになっちゃったね」

「どうなっちゃってます俺の体！！？」

上条は不安そうな顔で聞く。

「まず、全身の筋肉組織の密度が上がり、全身の神経：特に右足の部分が大きく肥大化してるね」

「だから右足が時々熱くなってたんですね」

「ちなみに君の言う変身の原理は実際になったところを調べないとまったく分からないのであしからず」

「大丈夫なんですか？こんなことになっていて」

「今の所はね…」

「今の所はって、どういうことじゃん？」

「これを見てくれないかな？」

ベルトを中心に撮られた映像をいくつも見せる。

「腹部のベルトを中心に無数の神経のようなものが伸びていて、な

おかつ完全に融合しているから僕でも摘出できない。
そしてこれが脳にまで届けば恐らく――」

「「恐らく?」?」

カエル顔の医者は静かに言う。

「未確認と同じ、戦うためだけの生物兵器になるだろうね」

沈黙が周りを包む。

「大丈夫ですよ」

上条は笑顔でその空気をぶち壊す。

「俺は何があらうとも変わりませんよ。」

だから大丈夫です」

11…10 第十三学区

スキルアウトの少年は現れたそいつから必死で逃げていた。

あの時は久々のエモノが見つかったと思ったが、違った。

自分達が獲物だったのだ。

時々聞こえてきた仲間たちの悲鳴は聞こえない。

つまり――

「はあ…はあ…はあ」

物陰に隠れてあたりを見渡すが、誰もいない。

（たすか——）

少年の希望は、^{げんそう}目の前に現れたばったの化け物によって殺された。

11..30 第七学区 病院（外）

「そういえばこの前渡しそびれてた物があるじゃん」

そう言って一枚のカードを渡す。

「なんですかこれ？」

「偽造免許証、なるべく早く本物取りに行くじゃん」

「警備員的に大丈夫なんですか？」

「————全然大丈夫じゃないじゃん!!」

（エ~~~~~!!）

「だからなるべく使うなよ」

「はい…」

「ちょっと—!!」

御坂がやってくる。

「どうしてここにいるんだ？御坂」

「電話したらアイツがいつもの病院に行ってるって言ったのよ！！」
いつもので通じるくらい入退院を繰り返している事実へこむが、
いったん置いておく

「なんのようだ？」

「あれから考えたんだけど、あんたのあれがなんなのか診てもらおうと思ったのよ。」

先にやられたけど…」

「その点は安心しろ。一生取れないって言われただけだ」

「それって十分悪いわよね！！？」

そのまま最後は死んだらどうするのよ！！」

「大丈夫」

「なんでよ」

「だって俺…クウガだもん」

「クウガじゃないでしょうが！！」

体から電流が流れてくる。

「前にも言ったわよね……死んだらどうするのって？」

「だったら俺も言っただろ？絶対に死なないって」

めんどくさいといった感じで上条は答える。

それに御坂は凄く腹が立った。

「かってになさい！！」

御坂は足音荒く帰っていった。

12…30 第七学区 警備員分署

「先日の件を説明してもらいたい」

そう言って一枚の写真を出す。

それはトライチェイサーに乗って走るクウガの写真だ。

「なぜ第四号にトライチェイサーを渡した」

「渡した方が有効だと判断したからです」

「結果的にうまくいった。だが……今後はどうなるか分からない。第四号が敵対したら、君はどうするつもりだ？」

「その時は——自分が始末します」

「君を対策本部から外したくはないんだがな……」

「その時は、自分だけで動くだけです」

所長はため息を付いた。

14..36 第十三学区

「バギング ドググゲギド」

人間の姿の第六号は、たった今殺した少女を見下ろしながら左腕のいくつも腕輪に付いた勾玉のような物を動かす。

「オイ!! いったい何を――」

「バギング グシギビンレバ」

近づいてきた警備員の首を掴もうとするが

「ごはっ」

横から飛んできたクーラーボックスが直撃して跳んでいった。

「危ないところだったな」

そっちの方が危ないのは突っ込まないでおこう。

「はじめましてと言っておく」

そこにいたのは黒い男。

コート、シャツ、ズボン、靴、手袋、マフラー、帽子、髪それらすべてが黒一色で統一された肩にクーラーボックスをかけた真っ黒な男。

「バンザ　ゴラゲザ」

「名乗るほどの者ではない」

黒い男は肩に抱えているクーラーボックスのふたを開け、ひっくり返す。

すると中から赤い液体が詰まったビンが幾つも落ちてきて、地面に当たって割れていく。

「強いて言うならお前を――」

液体に指をつける。

「捕獲しようとするものだろうな」

瞬間、液体が伸び、第六号に襲い掛かった。

P M 0 2 .. 5 0　第七学区　上条家

上条が、トライチェイサー（雲川経由でカラー変更）を洗っていると、警備員の通信が聞こえてくる。

（そーいや、警備員の通信傍受できるようにしたって土御門が言ってたな）

隠蔽具合は多角スパイの悪友が保障してくれてるから問題はないだろう。

〈未確認生命体第六号が十三学区に出現。現在一般人と交戦中。至急救援に向かえ〉

「マジかよ…」

あいつらは超電磁砲も聞かない連中だ。

そんなのと戦うのは無謀にもほどがある。

だけど、それが間違っている訳でもないことを上条は知っている。

戦うのが悪いことじゃない。

戦わないことが悪い訳じゃない。

最も悪いのは何もしようとしないことだ。

だから上条当麻は戦う。

誰かの涙を止めると決めたから

トライチェイサーを発進させ、人気のない通りに入り、パスワードを入力する。

機体の色が変わり、馬力が上がる。

「変身!!」

上条は変身し、第十三学区まで最短距離で走っていった。

P M 0 2 .. 5 6 第十三学区

「斬れろ」

黒い男の右手を中心に浮かぶ紅い液体が刃のようになり、第六号に胸を切るが、胸の筋肉を多少切るだけに終わる。

「穿て」

刃だった液体が一瞬で錐状になって腹に直撃するが、2センチくらいしか刺さらない。

そして瞬く間に傷は回復する。

六号の攻撃を液体で防ぎ、液体や銃で攻撃し、六号が回復する。

さっきからこの繰り返しだ。

「ダイアも貫くんだがやはり2ケース分では量が足りないかいっそのこと適当な学区に誘導して——」

警備員の車のサイレンが聞こえてくる。

「やっかいだな」

呟いた瞬間、警備員が五人来る。

「速く下がるんだ!!」

「安心して下さいもうじき応援が来る」

「ねむってもらおう」

後頭部を液体が叩く。

液体は速ければ速いほど一撃の重みが増す。

水に手を入れて思いっきり動かすと手ごたえを感じるのと同じ理屈だ。

「目撃者は排除しろと言われたが生憎ここは監視の目がキツイただの変な格好をした一般人ということにしてもらうか——」

エンジンの音が聞こえてくる。

「来たか俺一人では勝てるわけもないフェリア誘導を頼む」

——りょ——かいとりあえずそのマンホールに入っ——

近くの店のスピーカーから声が聞こえてくる。

男はマンホールを液体で破壊して落ちていき、それと入れ違いにクウガがやってくる。

「お前……」

周囲の惨状を六号がやったと思ったクウガは怒りを顕にしながらトライチエイサーから降りる。

「クウガ ジガギツシザバ」

第六号の声は何処か嬉しさを含んでいる。

「キョゲギンジャンママ　ズ・バザー・バ　ザ」

軽く上体を揺らしながらそう言い、こっちへ来いといわんばかりに親指を刺し、走り去り、

クウガは追いアパートのような場所につく。

周囲は同じ建物の一部で囲まれていて、見通しが悪い。

そして見渡しても六号はどこにもいない。

（くそっ…逃げられたあっ―）

上の階に隠れていた六号が飛び掛り、クウガの後頭部を殴る。

「があっ」

思わず膝を付いたクウガめがけて踵落としを繰り返す。

体を捻って避け、足を払おうとするが、六号はジャンプで簡単に避ける。

クウガもジャンプして追うが、六号の半分も届かず、階段の手すりにつかまる。

（全然足りない！！）

上ろうとするが、六号に突き飛ばされる。

「があっ！！」

「ゾン デギゾバ クウガ」

（なめんな！）

立ち上がり、階段を上っていく。

そこを六号は強襲！

けり倒され、立ち上がろうとするが

「ぐっ」

ふくらはぎを踏みつけられる。

顔を散々踏まれ、地面向かって放り投げられる。

（このままじゃ…！！）

圧倒的にジャンプ力が足りず、一方的に攻撃される。

このままだと確実にやられる。

だが——高さが足りない。

「高く…もつと…高く…！！」

そう思いながら屋上にいる六号めがけて跳ぶ。

クウガは

屋上に立っていた。

(え…どういう…)

体を見てみると

「青くなった・・・？」

胸が赤から青になっているが、肩のパーツがなくなっていたりなど、全体的に軽装になっている。

「ゴグザ　ゴンガググギギ」

そう言って第六号はクウガに殴りかかる。

だがクウガはすばやくジャンプして簡単に避ける。

続いて放たれた蹴りを前転してかわす。

「おらあっ！！」

思いつきり殴るが、かまわず殴り返される。

「のおっ！」

連打するがまったく聞かず、今度はけられる。

「ボギ」

そう言ってジャンプで別のビルに跳ぶ。

クウガはそれを追いかけて、五棟くらい跳び渡る。

「ジャンプ力が…上がってる」

六号の不意打ちを避け、殴るが、全然聞いていない。

「パンチが…弱くなってる」

（ならっ!!）

後ろに下がり、助走をつけてとび蹴りを放つが、チョットずれるだけだ。

（蹴りもかよ!!）

「ゴチソ」

六号は足を掴み、思いっきり分投げる。

クウガは地上8mの高さから落下する。

「ぐっ…あうう…」

何とか立ち上がるが、膝を付いてしまう。

限界が、近づいていた。

Episode 6 聖杖（前書き）

何とか書きあがった……

Episode 6 聖杖

黄泉川は哑然としていた。

未確認の情報を頼りに追いかけていたら、何かが落下してきたからだ。

「あ…ぐうううう」

よろよろと立ち上がるが膝をつく後姿は紛れもなく

「上条…!!」

駆け寄ろうとする黄泉川の進路をふさぐように六号が降りてくる。

「――げろ…」

クウガは力を振り絞って立ち上がり、六号を羽交い絞めにする。

「逃げろおおおおおおおおおおおおあああああ!!!!」

黄泉川は一瞬気圧される。

「ヂヂ」

六号はかまわずクウガの腹に肘うちを決め、首に後ろから手をかけ、力づくで前に投げ飛ばす。

「ボンガギザン ガゴドパチバグバ」

「おあぁっ!!」

立ち上がりながら黄泉川を後ろに突き飛ばし、走りながら殴りかかるが六号は拳を掴み、

引き寄せながら鳩尾に膝を突き刺し、頭突きを決め、流れるような動きで後ろ手にする。

「ガゴゴバサ ダダビツゲデジャス」

そう言って さっきまでいたところよりも高いビルに顔を向ける。

「ドゾレザ」

足に力を込めた瞬間、風がこっちに吹いてきた。

「ン？」

風上を見ると、一本だけ立っている煙突から薄く煙が流れている。

第十三学区——小学校や幼稚園が多くあるこの学区に唯一存在する食品工場からのものだ。

「ギボヂヂソギ ギダバ」

六号はクウガを突き飛ばして、何処かに跳んで行った。

クウガはうつ伏せから仰向けになるが、それ以上何も出来ず、気を

失った。

19..04 第七学区 病院

御坂と御坂妹は血相を変えて（妹の方は相変わらずの無表情だが）病院に駆け込んだ。

黄泉川から上条が未確認と戦って大怪我をしたと聞いたからだ。

「あのシスターは？」

上条を一番心配してるであろうインデックスがないのを御坂が疑問に思う。

「上条が呼ぶなって言ったじゃん」

「そうですか。」

ところで、彼は大丈夫なんですか？とミサカは問いかけます」

「今精密検査を受けてるけど――」

「よう」

言う前に上条がやってくる。

「アンタ!!! 大丈夫なの!!!?」

「全然平気だ。次は止めるから期待してろ」

「貴方の事は信じていますが、大丈夫なんですか?とミサカは疑います」

「!!-- ああ……問題ない」

御坂妹の言葉にピクリとしながらも上条は応えて帰っていく。

エンジン音が聞こえるのと入れ違いにカエル顔の医者が走ってくる。

「彼はどこにいったんだい?」

カエル顔の医者はあきらかに慌てていた

「大丈夫って言って帰ったんです「冗談じゃないよ」」

御坂の言葉をさえぎって放たれた言葉には、明らかに怒気が籠っていた。

「え?」

「昔の彼の体でも死んでるか一生寝たきりになるほどの損傷があった。」

そして強化された体でも一月以上絶対安静なのに……どうして動けるんだ」

（あのバカ!!）

心配する方の身にもなりなさい!!）

その頃上条は

「あっ……」

曲がりきれずド派手に転倒してしまい、倒れていた。

内臓がぐちゃぐちゃになっているような吐き気と痛みに耐えながら立ち上がり、

よろつきながらもトライチェイサーを立て直す。

目もまともに見えない。

正直病院に行ったほうがいいレベルだが、それでも帰る。

「インデックスも心配してるだろうし……早く帰らないと」

死に体の体に鞭打って上条は押していった。

20..50 ? 学区 ???

「ガムムシボソギデ ビダ バギングズゴゴド ズゴゴビンザ」

六号は自慢するかのように上機嫌に語る。

「ザグガド パパンビヂゼ ゼビスンバ」

だがバラのタトウの女はその先にある「何か」にしか興味がないようにも見える。

「ドグゼンザ」

クウガに圧勝したという事実もあり六号の機嫌は最高だった。

「ゴギ ガベザガベザ ガベザ」

そう言いながら三号が飲んでいた酒を引っ手繰り、一気におった。

3. 3 1 0 9 .. 3 4 第七学区 上条家

御坂は上条の家を何とか見つけ見舞いに来た。

だが――

「昨日とうまが帰ってきてすぐ寝ちゃったんだけど、全然起きないの。」

叩いても揺すっても馬乗りになって殴っても踊っても起きないんだよ」

御坂は無言で入る。

「――よかった…」

上条の体はまったく動かないが、胸が上下してるから生きてはいるようだ。

「シスター…今度からは寝てる人を起こす時は優しくしなさい」

「え？」

「じゃないとユルサナイカラ」

御坂のあまりにもいい笑顔を見て、インデックスは生まれたての小鹿並みに震えながら頷いた。

10…40 第十一学区 警備員分署

「第十一学区で発生している未確認生命体第六号について分かったことがある。」

第六号が殺人を行う場所と、その時の風向きには関係性があることが分かった」

工場の煙突の写真が画面に出てくる。

「第六号の犯行場所とその時の風向に対して風上で行われている。」

そのことから推測して現時点で推測される犯行場所は――こうなる」

煙の範囲と犯行予測地点が書かれた映像が映る。

「総員、全力でやつを止めてくれ」

11..34 第七学区 ファミレス

上条は無言で赤と青の容器を眺めていた。

（赤いクウガだと力は十分だけど距離が足りない。

青いクウガだとその逆……どうすりゃいいんだ）

「隣、いいか」

土御門が席に座る。

「無駄話なら考え中だからあとにしてくれ」

「そうはいかないな。これはどうしても必要なことだからな」

土御門は携帯の画面を見せる。

「遺跡の壁画に記されている文字だ。」

現時点では奴らの総称がグロンギって事しか分からないが、

恐らくこの中にクウガのヒントが隠されている」

「お前、何でそれを……それに、何でそんな事を俺に言うんだ？」

「ニャー、俺のポジションを考えれば、クウガの正体ぐらいはすぐに分かる。

それと、もう一つの質問だが、

未確認を殺せるのはカミヤんのクウガ、一方通行の白い翼、ヒューズカザキリ、

アレイスター、そしてエイワスくらいだろう。

だが、自分最優先のアレイスターとエイワスが協力する訳がないしヒューズカザキリの基は

現在向こう側。

一方通行のアレは不安定。

つまり、実質カミヤん以外頼れるやつがないんだよ」

「そうか。

かわりっていったってなんだけど、俺の相談も聞いてくれ」

「かまわんぜよ」

「赤だとアイツに追いつけなくて、青だと力が足りないんだよ」

「多分状況にあわせるんじゃないのか？」

普段は赤で、アイツみたいなのには青って感じで」

「なるほどね〜」

その時、外にとめてあったトライチェイサーから電子音がする。

〈未確認生命体第六号を発見。これより——〉

「勘定たのむ」

そう言って上条はファミレスを出る。

「勘定って——」

伝票には5万円と書いてあった。

11…45 第十一学区 屋上

警備員は最新鋭の駆動鎧パワードスーツも使って六号と戦っていたが、

六号はそんな物お構いなしで警備員を撃滅して行った。

（重機関銃にも耐えられる代物だったのに……規格外にもほどがあるじゃん）

車の裏に隠れている黄泉川は心中で愚痴りながら構える。

学園都市の最新戦車にも穴をあけれる無反動砲。

許可がおりたのはこれ一個のみ。

壊したら始末書じゃすまないレベルだ。

（これなら多少は――）

「ゴオオオオオオオオオオオ」

六号は駆動鎧を持ち上げ、黄泉川のほうにブン投げる。

（マジ!!?）

黄泉川はとっさにしゃがむが避けきれず、頭に当たった。

「ブン」

六号は別の場所に向かおうとするが、床をぶち抜いた液体に絡め取られ、

二階まで引きずり込まれる。

「今回は35人分＋αだ」

黒い男は服の上に所々が銀色がかった鎧のような物を纏っている。

「死ぬ気で来い」

両腕を思いっきり振った瞬間、六号の四肢に切れ目が出るが、元に戻る。

「これでもたりないか何とかして死体の確保に移る」

剣を出して切りかかる。

六号は跳ぶが、液体が足に絡みつき再び落とす。

立ち上がったところに液体の鎧から大量の槍が飛び出る。

六号は槍同士の隙間を抜け男の顔を殴るが、よけられカウンターに液体の爆発を利用した

蹴りで思いっきり飛ばされる。

「人間を舐めるな」

槍をしまい、両手と両足の装甲が厚くなる。

「この町を舐めるな」

右腕の液体が発射され、六号のガードをぬけて跳ね飛ばす。

地面に落ちた液体をヨリから伸びてきたパーツが回収する。

「この町の闇を舐めるな」

拳を流し全身を絞り込むような掌底を腹に当てる。

水の衝撃波も合わさって六号が宙に浮く。

「この町の光を舐めるな」

回転しながら叩きこんだ打ちおろしで床にめり込ませる。

「もう一度言うこの町を――」

全体重をこめて

「舐めるな」

震脚を叩き込む。

（これですこ――）

思考は右足めがけて放たれた蹴りで中断される。

水銀を軽く越える比重の液体が混入されている鎧が一瞬で弾け、膝を引きちぎった。

「うああっ」

集中が一瞬乱れ、鎧が揺らぐ。

本来なら急所部分は避ける一瞬を稼ぐのに十分な厚さだったが、今この瞬間は貧弱そのものだ。

その隙を六号は本能で感じ取り、液体を貫いて首を掴む。

「ギェ」

六号は男を思いっきり投げ飛ばす。

（傷口に蓋止血をさいゆー）

跳んできた六号が頭を潰そうと踵を上げている。

回避も防御も思考が間に合わない。

（ここま——）

次の瞬間、上から飛んできたトライチェイサーが六号を跳ね飛ばし

上条が男を抱え、地面に落ちた。

「つて〜。大丈夫か？」

「あ…ああ」

（いったいどうやって上から音は——）

答えは上でホバリングしている無音輸送機だ。

（ありがとうございます、雲川先輩）

曰く下心満点のおせっかいらしいが、誰かが助けてくれるのは、純粹に嬉しかった。

「ここから離れてくれ。あとは俺がやる」

「あんなのに勝てると思ってるのか？」

目の前の男には対抗できる力はあるのは知っている。

だが、聞かないのはへんなので聞いておく。

「大丈夫だ」

上条当麻は当たり前のように言葉をつむぐ。

「俺はクウガだからな」

「そうか」

構える上条を後ろで見ながら男は下がる。

「変身!!」

飛び掛ってくる六号に対抗するようにジャンプしながらクウガになる。

クロスカウンターで打ち負けたその姿は——青

「いきなり青か!!?」

驚きながらも六号から距離をとった。

13..46 グループのアジト

土御門は必死でパソコンを操りながら考えていた。

やっていることは碑文の解読だ

（くそっ……やっぱ読む方法を聞いただけじゃ解読するのはムリか？

いや、諦めるな！！

カミヤんを生かさないと確実に人は死ぬ。

そうなれば舞夏の死ぬ可能性も上がる。

それだけは食い止めるんだ）

そんなことを考えて翻訳していると、メールが来た。

（送信者は……シェリー・クロムウェル。内容は——碑文の一部解読に成功！！？）

こういう絵画じみた物を解読させるのに彼女が適任だと思ってたために一部送ってみたが、

それがうまくいったようだ。

「内容は……」

13..50

「う…ううっ…」

黄泉川は呻きながら目を覚ます目を覚ます。

立ち上がると頭が酷く痛み、視界の右側が真っ赤だ。

どうやら相当深く切ったようだ。

「六号はどこにいるじゃん」

携帯端末を取り出し、聞く。

〈現在第四号と先頭たぶんを行いながら北西に移動中です〉

（無事でいろよ）

黄泉川は痛む頭を押さえて止血を開始した。

同時刻 第十一学区

戦いながら大きな公園に移動したクウガは苦戦していた。

あっちの攻撃は思いっきり効くの、こっちの攻撃はまったく効かないからだ。

（くそっ。どうすりゃいい！！？こっちの攻撃はまったく効かない。

蹴りをいれてもやられる前兆が見えない。

どうしようもねえじゃねえか)

六号の拳を上半身の動きと手だけでさけ、蹴りを防ぎ、後ろに飛ぶ。階段の段差と中央の手すりを利用して避け続ける。

〈カミヤん!! 長き物だ〉

何処かのスピーカーから土御門の声が聞こえてくる。

〈水の心の戦士、長き物をもって敵を薙ぎ払う!!〉

碑文の中にあった!!!〉

(長き物つつても——)

「ギベ」

回避した拳が手すりをへし折る。

「これだ!!」

手すりを引きちぎり、六号から距離をとり、左手を軸に回転させ、構える。

すると、手すりが一本の杖になり、両端が延びる。

その杖が放つ存在感は、後方のアックアそれに匹敵する。

杖を見た瞬間、上条は理解した。

いけると

「はあああああああ」

杖を振り回し、上下左右から六号を叩く。

六号の蹴りを杖先で弾き、顎をカチ上げる。

右手でフックを払い、バットのよう振って六号を飛ばす。

(これで

終わりだ)

「おらあああああああああ」

クウガは六号めがけて思いっきり跳び、杖を突きこみ、押しとばす。

「グ　ググググ」

六号の右肩に紋章が刻まれ、亀裂がベルトに向かっていき――

「グゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

爆散した。

「はあ…はあ…はあああ」

杖を支えにしてなんとかたっていると、車に乗った黄泉川がやってくる。

「上条……」

「先生……」

安心したのか元に戻った上条は、膝を着いた。

4. 1. 上条家

「どうしたのとうま？」

「昨日から右手が痛いんだよ……」

「そうじゃなくて、さっきから醤油とソースを見てどうしたの？」

「いやね、世の中バランスが大事なんだなって思ってさ」

「バランス？」

インデックスは首をかしげる。

「醤油は刺身とかにかけて…ソースは——」

「カレー！」

インデックスは上条の言葉にかぶせるように言う。

スフィックスは「いや、自分はカレーはマヨネーズ派なんですけど」
って感じでなく。

「だな…」

「とうま、醤油とって」

「ほらよ」

上条はインデックスに醤油を渡し、インデックスは容器を傾ける

が

「とうま

切れてるよ」

「えゝ」

「わたしは醤油が使いたかったんだよ…」

インデックスの目から殺気が出てくる。

「じゃあ今から買いに…」

「モウイイ トウマノチジョウユダ!!」

インデックスの牙が上条の頭に突き刺さり、

「不幸だあああああああああああああああああああああ
あ」

上条の叫びが響き渡った。

Episode 6 聖杖（後書き）

次はペガサスへんです

Episode 7 失踪（前書き）

サブタイが浮かびません。
誰かあんをください

Episode 7 失踪

4・15 15..50 第七学区

黄泉川と鉄装は今日出てきた未確認生命体第十三号の始末書を書いていた。

今回は被害者がかなり少なかった代わりに第四位が大暴れしたせいで物の被害の方が

かなり凄いことになっていた。

「そういえば先輩」

「なんだ？」

書類を整理しながら黄泉川は尋ねる。

「第零号の殺人現場付近を調べていたら、大規模な墓のような物が見つかったそうです。

それも、最近掘り起こされたような」

「それって未確認の？」

「恐らく」

「規模は？」

鉄装は何秒か間を置いていった。

「少なくとも見ても

二百人です」

4. 16 ? ? ? ? ? 学区 ? ? ?

銀髪の男はラジオを手に持って眺めていた。

「バンザ ボセバ」

と、一緒に眺めている三号。

「ラ~~ジ~~オ~~」

妙に間延びした言い方でそう言ってつまみをいじる。

適当にいじっていると、未確認のニュースが出てくる。

「ミ カ ク ニ ン セ イ メ イ タ イ」

銀髪の男は、ぎこちないが確かに日本語を話した。

「バビンボドザ」

と、マッチョの男。

「ゴセダチンボドザ」

銀髪の男は自分を含めた全員を指差して言う。

すると、扉が開いてバラのタトウの女がバンダナをまいた男

装飾品を大量に付けた男

円錐形の帽子をかぶった男

プライドが高そうな女を引き連れてやってくる。

「バゼゴ ラゲダヂグ」

「ゴラゲダヂグ ボグバギ ザバサザ」

マッチョの男にアクセサリーをつけた男は見下した風に言う。

「バンザド」

激昂したマッチョの男の姿が黒い犀サイのような未確認に変わる。

それにあわせるようにアクセサリーの男の姿がピラニアを思わせる
鋭い顎をもった

鈍い金属色のような肌をした魚人の未確認に変わる。

2体の未確認は睨み合い、激突しようとした瞬間――

バラのタトゥの女が手の動き一つで止まる。

「「……」」

お互いの利害が一致したこともあって人間の姿に戻る。

「ボセグゲン ジヅ」

「ボセバ サザ」

バラのタトウの女の言葉に、マツチヨの未確認はイラ付いた風に返した。

「メボバグドムセギジャジャザセザ」

「ラヅバゴセバギブ」

バンダナの男が前に出る。

三号は不気味な笑顔を浮かべながら、線とも文字のともつかない物が書かれたボードを出す。

バンダナの男は一瞥してからバラのタトウの女の前に立つ。

バラのタトウの女は、指輪をバンダナの男の腹にかざした。

08..50 第七学区 学校

「は~~~~~」

上条は思いつきだれていた。

「どうしたんやカミヤん」

青髪ピアスが陽気に聞く。

「五月蠅い黙れ寝かせろ」

ほぼ毎日未確認と戦っていたため、上条は疲弊しまくっていた。

だが一度寝ればほぼ全快するため改めて人外だなと改めて思うつい最近である。

上条は思考を放棄して寝ようとしたが

「おはようございま〜す」

先生に阻まれる。

「今日は転校生を紹介します。

女の子なので喜ぶがいい野郎共!!」

子猫ちゃん達は残念だったなあ」

「やったで!! ボキュに!! ボキュニ春が来たぶごう」

青髪ピアスは吹寄整理の最強コンボを受ける。

「静かにしなさい!!」

「ありがとうございます吹寄ちゃん。それでは入ってきてください」

扉が開いては言ってきたのは――

（なんつうか……すっげーもったいないな）

茶色っぽいロングヘアー、全体的に細めだがメリハリの利いたライン、整った顔立ち。

美醜の境界が結構曖昧な上条でも綺麗だな……と思う程度には美人だった。

だが彼女の体から出てくる暗い物がそれらをすべて台無しにしていた。

「霧咲^{きりさき}雫^{しずく}です。よろしくお願いします」

普通に言うが、やっぱりなんだか暗い。

「では席は……上条ちゃー」

上条の隣の青髪ピアスが上条を蹴り飛ばす。

なぜなら上条の反対側の席が空席だからだ。

「せんせーここあいてますよー」

「ツツコミどころ満載ですがお願いします」

が歩いてくる。

「はじめまして雫ちゃん!!」

ボクは——」

だが雫は完全にスルーして席に付く。

「あれ~~~~?」

青髪ピスは首をかしげた

その後雫は質問攻めやらなんやらを流し、なんだかんだで昼休みになる。

「しかし……なんていうか——いいもんだよな」

上条はグラウンドで遊んでる（能力ありドッチボール）生徒を眺めながら呟く

「何がだ?」

と土御門

「改めてさ…補習漬けでも、留年寸前でも、いつもの日常っていいもんだって

最近思ってきたんだよ」

「そうだな：オレも最近改めてそう思う」

仕事中に未確認に遭遇することが何回かあった。

あいつらには自分の魔術も効かないし、

海原の原典はおろかトラウイスカルパンテクウトリの槍にもたえきり、

ムーブポイント
座標移動も回避してくる

前出てきたヤモリみたいな未確認も黒い翼を相手に生き残るという異常を通り越した異常な生命力を持っていた。

「正直何とかなるっておもってたが、今の所カミやんに頼る以外道がないにゃ」

無念そうに土御門は言うが

「まかせとけ」

上条は振り向きながら笑顔で言う。

「は？」

即答されると流石の土御門も呆気にとられるしかない。

「なんでそういえるんだ？」

「だって俺は——クウガだしな」

そう言って帰ろうとすると、グラウンドから悲鳴が聞こえてくる。

「「!!!!?」」

見下ろしてみると、誰かが倒れていた。

「土御門!!!!」

「わかってる」

二人は一気に駆け下り、土御門は倒れている生徒の状態を確認し

「ダメだ…脈がない」

上条に聞こえる程度の音量で呟く

「なっ…」

「土御門! 上条!!」

黄泉川がやってくる。

「いきなり倒れたって言うていたが——」

「黄泉川先生、チョットしゃがんでくれ」

「ああ」

「もう死んでるぜよ」

起こそうとするふりをしながら死体を軽く調べながら土御門は呟く。

「冗談：ではないみたいじゃん」

「先生は救急車と警備員を呼んでくれ。俺はカミヤンを落ち着かせる」

「——わかった」

離れていく黄泉川を見送り、土御門は上条をつれていくらか離れる。

「カミヤン。これは十中八九まちがはなく未確認だ」

「!?!?!」

「どういうことだ?」

「ざっと調べたが、何かが太ももを何かが貫通していた。

同じくらいの大きさの傷跡が頭の方にもあった。

つまり——」

「真上から？」

上のほうを見ても青空しかない。

「カミヤん……青い姿でいそうなところまで跳べるか？」

「……わからない」

青いクウガならビルの上まで飛べるが、空の上なんてわからなかった。

「最悪へりを用意するが――」

「ミスったら多分一日休みだと思う」

「とりあえずカミヤんの早退届は出しておく。」

トライチェイサーも運ばせるからあのファミレスにでも行ってくれ」

「ありがとな」

上条は外に走っていく。

「さてと…俺も一方通行に連絡して――」

13…35 第七学区

上条はトライチェイサーを駆って走っていた。

だが相手は空にいる上一回一回の距離が結構離れているから、後手に回るしかない。

だが傍受した警備員の通信を頼りに走っているうちに法則がつかめてきた。

（相手が殺すのは必ず外にいる一回につき一人ずつ。

一回やったら次に始まるのは十五分後）

「そして――」

上条は端末に転送された画像を見ながらつぶやく。

「一回目から順にすり鉢上に広がっている。

次にくるのは――」

今いる公園の近くだ。

（とりあえず高い場所に――）

「三下？」

「あんた」

御坂と一方通行がどういうわけか一緒に同じ場所からやってきた。

「お前ら：なんで一緒にいるんだ？」

ていうか御坂は学校だろ」

「あア？クソガキの誕生日プレゼント（誕生日はくじで決めた）を買いに行ったら会った。

オレじゃまともなのが浮かばないから頼んだ。

それだけだ」

「私も打ち止め（ラストオーダー）のプレゼント買いに行ったらこいつに会って頼まれたから嫌々手伝ってやったのよ。

あと学校は……」

無言が答えらしい。

（（要するに脱走したと））

「嫌々手伝うヤツが人のプレゼントに姑みたいに口出しするかア？」

「お前のプレゼントがあいつを傷つけたらどうすんのよ」

「『貴方のプレゼントなら何でも言い寄ってミサカはミサカはいじらしそうに言ってみる』って言ってたんだがなア」

「それでもよ！！」

「そうかそれじゃ俺はこれ――」

一方通行が上条の左のビルの方を見る。

「どうした？」

一方通行は無言で杖を突きながら走り出す。

それと同時に悲鳴が聞こえてくる。

「!!」

その瞬間上条は反転して距離をとり、車両防止の柵を一気に飛び越え、一方通行を後ろに乗せて走り出す。

「おろせ三下!!」

そう言いながらも電極を操作にし、適当な気の太い枝を折って持つ。

「こっちの方が早いだろ」

「チッ」

「もう少し加減しなさいよ!!」

いつの間にか御坂も磁力を操って着いてきている。

それを見て上条はため息を付くが、言い合ってもしょうがないのでこのまま走ることにした。

14..27 第七学区 学校

未確認が出たため授業は止まり、学校から出れなくなっていた。

そんな学校の一角で、小萌と雫は話している

「学校はどうですか霧咲ちゃん」

「はい。」

青い人は気味が悪いですが、問題はありません」

「そうですか

——お母さんに会う気はありませんか？」

雫の顔だ微妙にゆがむ。

「……私の身勝手な意地です。

それでは」

そう言って雫は立ち去ろうとする。

「どこに行くつもりですか!？」

ただならぬ気配を感じた小萌は叫ぶ。

「どうせ警備員は生きてる人間を優先します。

だったら……振り向かせてやるまでです」

そういった瞬間、雫の姿が消えた。

14…27 第七学区

一方通行が見た建物の裏手に蜂のような未確認生命体——第十四号が降り立つ。

「ジュンチョグザバ」

どこからか三号が出てくる。

「ゴラゲサドバヂバグ」

そう言って腕輪を操作しようとした瞬間——左手首に猛スピードで投げられた枝が命中し、

腕輪を割り、手首を折る。

「変身！！！」

上条は走りながらクウガになり、十四号を殴り飛ばし、そのまま戦闘に入る。

「こちとら用事があるんでなァ！！」

とつとと死にやがれ!!」

一方通行は足を思いっきり踏みしめ、瓦礫の弾丸を発射する。

「がほっ」

そのせいで跳び蹴りを放ったクウガまでふっとばす。

「なにしやがる!!?」

怒りながらも十四号にタックルを決めてマウントをとり、連打する。

「お前がただけだろオが」

振りほどいて逃げた十四号めがけて一方通行は瓦礫の弾丸を発射する。

だが十四号は空に飛んで逃げる。

「逃がすかよオ!!」

一方通行は竜巻の翼を生やし、飛翔し、殴る。

だが十四号も負けじとフックを放つ。

互いは互いの顔をうちぬき――

「グッ」

「がアッ…」

両者とも吹き飛んでビルに激突する。

一方通行はベクトルを操作して瓦礫から脱出し、顔周りの状態をチャックする。

（ちっとばかり鼻をやられたみてエだな。

やっぱり未確認の連中は反射の壁を突破してきやがる）

この前戦った未確認は多少衝撃がくる位だったが、今回は傷つくくらい突破してきた。

個人差があるのか、強くなっているのかは分からない。

だが下手をすれば完全に抜け切って命を落とすかもしれない。

だが――

「関係あるかよ……」

大事な人達を理不尽から守ると決めた。

だから一方通行は戦う。

「一気にけりつけるぞ三下ア！！」

一方通行が叫ぶよりも早く数百mを駆けたクウガは

「言われ」

パイプを杖に換えて跳躍し

「なくても!!」

十四号を倒すために突きこんだ。

バトルを尻目に三号は壊れた腕輪に向かって走っていくが――

「足止めくらいはさせてもらうわよ」

御坂が立ちふさがる。

「あんたらみたいなのがいるとあいつらの居場所がなくなりかねないのよね」

そう言いながら磁力を操ってそこらじゅうの金属を引き寄せる。

「だからとつとと」

大気や地面の砂鉄が集まっていく。

「消えなさい!」

磁力に操られた金属が二号めがけて一斉に襲い掛かった。

クウガは十四号を倒すために、杖を突く。

「グッ」

「あうっ」

だが十四号の右腕から発射された何かが腕を貫き、痛みで狙いがそ
れる。

「フンッ」

十四号はその隙にクウガを蹴り飛ばし、上に逃げる。

「あ…ぐうっ…」

（腕が…焼ける！！）

「手エ離せ、三下！」

一方通行が降りてくる。

「土御門の野郎が言ってたが、あいつは毒針を発射する未確認だ。

威力は見当も付かないから、血ごと抜くぞ」

結構な量の血液が傷口から出て行く。

「完了だ」

「御坂を頼む」

クウガは杖を再び作ってビルの上まで跳ぶ。

（傷が半分近くふさがってやがった…俺も人の事は言えないが、バケモノだな）

それに、アレだけの量を一気に無くせば多少なりとも貧血状態になるはずだが、

普通に動けるのも異常だった。

（さアて……恨みを買うのも面倒だし、オリジナルの方でも見に行くか）

一方通行爆音と閃光が瞬く方に飛んでいった。

御坂は雷撃の槍、砂鉄の顎、超電磁砲その他多数…

もてるすべての攻撃を駆使して三号を攻め立てる。

逃げる暇も攻撃する暇も与えないくらいの手加減無し連続攻撃を叩き込む。

そうしなければ確実にやられるからだ

だが三号の体は瞬く間に再生していく。

（ほんとレベル5第三位の名が泣くわね。

弱る気配もありゃしない)

御坂の視界が一瞬揺らぐ。

エネルギー切れが近づいていた。

(少し加減するとしても持って後五分：早く戻ってきてよね)

「バレスバアアアアアアアアアア」

怒った三号は「金色の雷」を出しながら地面を思いっきり殴る。

衝撃で地面が割れ、周囲が陥没する。

「マジ!!?」

驚きながらも御坂は磁力を操ってビルの上に飛び移る。

「アイツはどこ?」

電磁波を見て三号を見つけようとするが、どこにもいない。

周囲にも気配もない。

「……逃げられた…みたいね」

(それよりも、さっきの一瞬だけ、三号の体から凄い電磁波が出て

たような気が……)

クウガはビルの上に立ち、辺りを見回す。

十四号が飛んでいったビルは空中庭園になっていて視界が制限されていた。

(どうする？早く動けても相手が見えないと当てられない。

どうする？)

すると、どこからか虫の羽音が聞こえてくる。

クウガは音のするほうを振り向くが、何もいない。

とりあえず壁を背にしようとしたその時、背後から不意を撃つてきた十四号がクウガの後頭部を殴る。

「ぐっ」

倒れながらも床を削りながらも杖を振るが、苦し紛れに振ったそれは簡単に掴まれ、そのまま外まで投げられる。

「おっ……おおおおおおおおお」

必死で杖を壁に突き刺し、十mほど落下してその場に止まる。

「う・・おお」

腕力だけで杖にもたれかかった瞬間——クウガの体が変わった。

体と瞳は青から緑に鎧のような部分は角ばった物になり、左肩にプロテクターが現れる。

「緑に…なった？」

変化に気が付いた次の瞬間

「ああっ…」

突然の痛みに米神を押さえる。

（な…んだ……音が・・痛い!!）

緑の姿になってすぐには分からなかったが、音がよく聞こえてきた。

いや……聞こえすぎていた。

会話、電子音、エンジン音、その他多数。

とにかく学園都市の中にあるすべての音が聞こえているとしか思えない。

「あ　　っ」

姿が変わった影響なのか、元に戻ったパイプが体重に負けてへし折れ、落下していく中

脳味噌をかき混ぜられているようなレベルの頭痛に負け、上条は意識を手放した。

Episode 7 失踪（後書き）

ゴウマ電撃体フラグが立ちました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3737p/>

とある魔術の超戦士

2011年4月19日00時15分発行